中等國語讀本

新修二版

卷三

4a
810
昭5

41643

教科書文庫

4
810
41-1930
20000
90663

昭和五年十月九日

文部省檢定濟

中學校國語科用

中等國語讀本

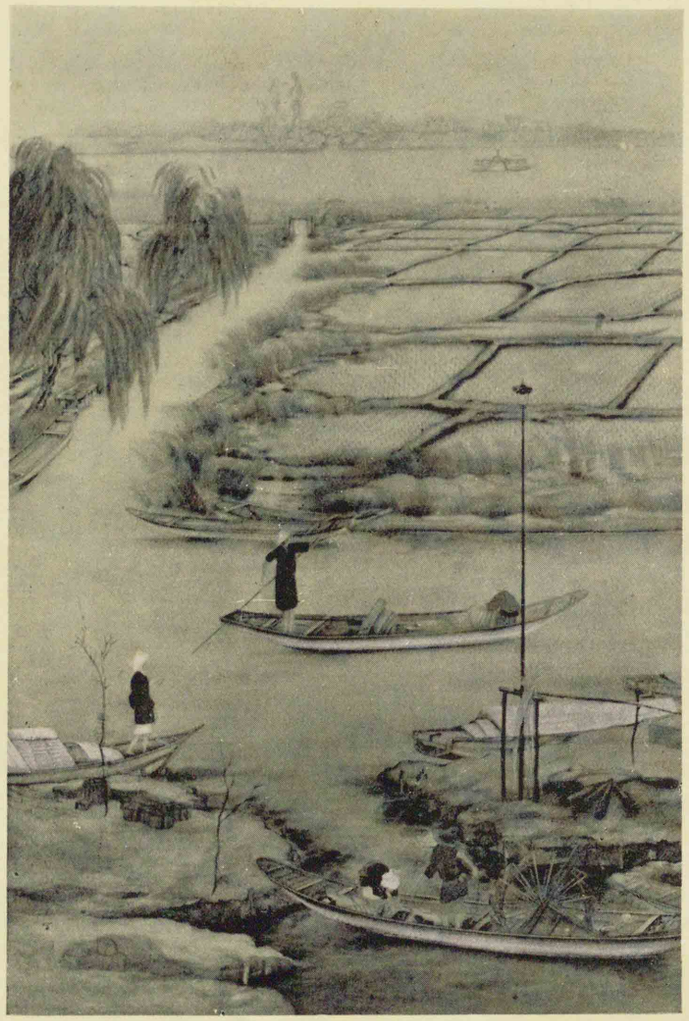
新修二版

廣島大學藏
90663
圖書

編者
落合直文
金子元臣

資料室

4a
810
AB5



水　鄉　（本田貞水筆）

二四　水國の秋

卷三目次

一　產土神と氏神……芳賀矢一……一
○二　愛國心……大島正德……七
三　御階の櫻（和歌）……一五
○四　御前會議の夜……金子堅太郎……一九
五　筍……薄田泣菫……二八
六　大宮人と武士……萩野由之……三三
○七　ローマの空を飛ぶ……鈴木文史朗……三九
○八　膽力の養成……嘉納治五郎……四八
九　鯉……前田夕暮……五五

一〇 池野大雅……藤岡作太郎……五九
一一 佛の化身……相馬御風……六三
〇一二 眞淵と宣長……佐佐木信綱……七一
一三 笑話三則……薄田泣菫……七九
一、熊の彫物……七九
二、命令法……八一
三、島……八二
一四 比叡の鳥……高濱虛子……八四
一五 舊師におくる……芥川龍之介……八九
一六 西瓜（新體詩）……尾崎喜八……九二
一七 月見草……阿部次郎……九四

一八 人の諫……新井白石……九八
一九 兒獅子……マーデン……一〇二
二〇 人の香……竹越與三郎……一〇八
〇二一 雲仙岳……菊池幽芳……一一三
二二 蘇武（新體詩）……坪內逍遙……一二三
二三 人の寶……貝原益軒……一二八
二四 水國の秋……德富蘆花……一三三
二五 歌話……一四〇
一、とりゐ坂……中村秋香……一四〇
二、あがたの宿……同……一四一
三、沖つ白波……菅茶山……一四二

二六 野口英世……一四四
二七 太陽禮讃……佐藤紅綠……一五六
二八 厨子王……森鷗外……一六一
（附錄）字音假名遣一覽
（終）

中等國語讀本 新修二版 卷三

一 產土神と氏神

家が集まつて村をなし、鄕をなす。そこには、村社、鄕社があるぢやうど、一家の中に神棚があると同じである。その神社を中心として、家家の祖先が和樂し、團結したやうに、代代子孫が和樂團結して行く。或は小高い岡の上に、或はよく耕された田圃の間に、こんもりとした松杉などの木立に包まれたお宮がそれである。茂つた森の端に鳥居が見え、石燈籠の

かう（かく）

見える景色は、外國には決して見られない我が國特殊の景色で、これが我が國特殊の歴史と國體とを語つてゐるものである。

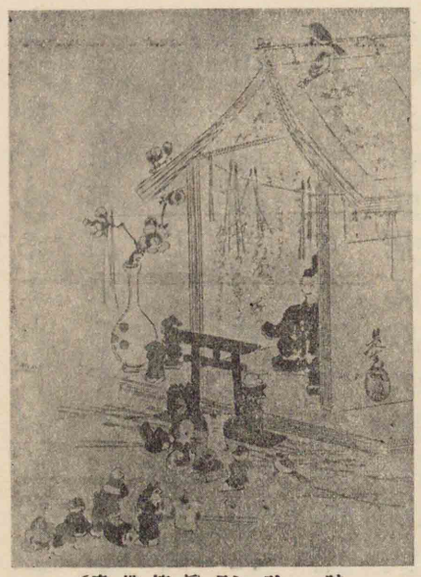
かういふ神社が産土の社である。子が生まれてお宮參をするのは、この郷土の一家に、新しい小國民が生まれたことを産土神にお知らせするのである。産土神は郷土の守護神である。豊かな秋の實のりの後では、この守護神の境内や、その附近に宮相撲の行はれることもあり、村芝居の催されることもあつて、娯樂の中心地ともなる。神代の昔、天の岩戸の前で、神神達が神樂を催されたやうに、村人はここに集まつてお祭をするのである。大人も子供も、一緒になつて樂しむ

かかつて（かかりて）

擔いで（擔ぎて）

のである。

都會の大きな神社の祭には、昔は大抵御輿をかつぎ廻つたり、花山車を曳き出したりして、大層な賑であつたが、今は電線が縦横にかかつて居つたり、電車が東西に走つたりするのも一つの原因で、さういふ事はやめになつたが、町内の家家に金屏風を立て廻して、昔の花山車の人形を飾り、軒毎に提灯をつるし、町内の子供が樽御輿を擔いで遊ぶなどいふことは、今の東京などにも遺つて居



神　社（是眞筆俳畫）

造花で造つた山車山車はお祭の時飾物などのせて曳き出す車

る。又神社の境内の神樂殿では里神樂を奏することも多い。この日、家家では赤飯を炊きなどして祝ひ合ふのである。

産土神と氏神とは別である。氏神は同じ氏の人人の尊崇した神である。これは、家が段段大きくなつて、分家の分家、又その分家が出來るやうになつて、一族が多くなつて來たので、祖先を同じうする者が共同に祭つた神である。つまり家の中の神棚を、更に大きくしたやうなものである。一例をいへば、藤原氏の氏神は奈良の春日神社で、遠つ祖の天兒屋根命を祭つて居るのである。源氏の氏神は男山の八幡宮であるが、これは頼義、義家が尊崇し、義家は八幡宮の社前で元服をして八幡太郎義家と名のつた程であるから、源氏ではこ

同じう。（同じくする）
春日神社　奈良市春日野町にあり。
八幡宮　京都府乙訓郡八幡町にあり。應神天皇を主神とす。
頼義　源氏。頼信の子。鎮守府將軍。（一一七三四年）
義家　頼義の子。文武の名將。鎮守府將軍陸奥守。（一七〇一年―一一六八年）

れを代代氏神とする事となつたのである。これ等はいふまでも無く、家を重んじ祖先を尊ぶ風から起つたものである。しかし今日では、各市町村の住民は、本籍の人はもとより寄留民までも、その居住所の神社を産土神として尊崇し、さうしてその氏子となるので、産土神は氏神と同じやうになつた。

郷土の神、氏の神、いづれも祖先に關係縁故があつて、子孫から見ればなつかしい親しみがある。郷土の人人は、これを中心として團結する。郷土の平和をみだす者があり、氏の名を汚す者があれば、おのづからその郷土から逐はれ、その氏から斥けられるのは、ちやうど一家から勘當されるのと同

重。んず（重くす）
なつかしい。

勘當　家長の許から追出されること。子が弟子の行が悪いためその父や師匠がほ一言をやつても一向あらためないやうなとき、親子師弟の関係を絶つて追出す。

ひとり山田を守つた　明治天皇御製、「子らは皆いくさの庭にいでててて翁やひとり山田もるらむ」。

あつぱれ（あはれ）　聞いて（聞きて）

今上陛下　大正天皇。

芳賀矢一　福井縣の人。東京帝國大學名譽教授、國學院大學學長、文學博士。昭和二年二月歿す。（一二五二年―一二五八七年）

じであつた。

郷土を離れ、遠方に出た者の常に忘れることの出來ないのは産土の社である。海外に出征した兵士の夢に入つたのも、なつかしい産土神の森であつたらう。ひとり山田を守つた父老たちも、日夕この産土神に祈つて、あつぱれ我が子も國家の爲に盡せと願つたのである。戰死者の爲に記念碑の建てられた場所も、産土神の境内が多い。戰役記念品の置かれたのもここである。明治天皇の御大患と聞いて、東京市民は二重橋の外にひれ伏して御快癒を祈念したが、地方の人人は、皆産土神の境内に集まつて祈願した。今上陛下の御大禮を遙拜したのもここである。（芳賀矢一　國民道德教科書）

あらう。（あらん）

二　愛國心

大島正德

人は社會を成して生活するのが本能であるとすれば、人がその住むところの社會、乃至國家を愛するのも亦本能である。如何なる國民も、その國を愛せぬものはない。その方法、その程度には多少の差異はあらうが、國を愛するといふ心に於いては、何れの國民も變りはない。その家族、朋友を愛し、その郷土を愛し、延いてはその民族團體を愛するのは、蓋し人情のおのづから然らしむる所である。

全うする（全くする）

然し、國を愛する心があつても、ただ盲目的にこれを愛するといふ譯には行かない。各の國民は、その國家に就いて、それぞれ自覺するところがなければならぬ。それ故に我我日本人は、この愛國心を全うする爲に、立國の大義をあきらかにし、國體の特徴を辨へ、而して國體の精華を永遠に發揮する事に努めねばならぬ。我我日本人は、この日本といふ國家を離れ、日本の國史を離れては、日本人たるの意味をなすことは出來ない。我が國が君主國體として萬世一系の天皇を戴き奉り、血族親愛の關係に於いて萬國無比の國體を成せることは、我我國民の光榮であつて、この天壤無窮の皇運を扶翼することは、實に我我臣民の本分であり、且又我我の祖

成り立つて（成り立ちて）
隨つて（隨ひて）
平和宣言の大詔　大正六年五月にいづ。
進んで（進みて）

先の遺風を顯彰する所以である。

然し、愛國心に就いて聊か注意すべきことは、それが徒に國自慢となり、排外心とならぬことである。如何なる國も、それぞれ精神的、道德的存在なる人格者を要素として成り立つて居るものであるから、如何なる國家も、また道德的、人格的なる一大存在である。隨つて相互の國家の間に、互に敬意を拂ふべきは當然である。自國を尊ぶべきが故に、他國を卑しむべきではない。それ故に、かの平和宣言の大詔にも、「進んデハ萬國ノ公是ニ從ヒ、世界ノ大經ニ仗リ、以テ聯盟ノ實ヲ擧ゲンコトヲ思ヒ」と宣はせられたのである。我我は日本國民として、我が君主國體の最も美しき、最も貴きことを信じ、

我が國家の隆盛發展を圖ることに努力すべきは當然であるけれども、それだからと云つて、他國の國體を猥に非議し、罵詈してはならぬ。それぞれの國家にはそれぞれの歴史があり、特徴があり、又それぞれの國民がそれぞれの國家を愛する念慮に於いて、變るべき筈がないからである。恰もどの家の子も、その家を愛する念に於いては變りが無い筈であるやうなものである。

故に、互に各その家を愛する心を尊重するが如く、相互にその國を愛する心を是認し、尊重すべきである。それぞれの國家は歴史を異にし、事情を異にし、民情を異にしてゐる。日本國民の歴史は米國民のそれではない。故に、我我は我が國

維持しよう（維持せう）（維持せん）

體美を尊び、これを永遠に發揚することに努力しなければならぬが、米國人がその建國の美を誇り、これを永久に維持しようと努めることを不都合だと非難すべき理由は無い。彼等が國民として當然の心掛を持つことに、敬意を拂ふ雅量を持たなくてはならぬ。これが國際的良心ともいふべきものである。茲に於いて萬邦協調して世界文明の上にその特色美を競はしむることが出來る。彼の獨逸が一敗地に塗れて一時立ち難いやうになつたのは、獨逸國民があまり國自慢になり、排外的になつたことに原因することを忘れてはならぬ。

又國民はその長所、特質を自覺し、尊重すると共に、その缺

就いても（就きても）
知つて（知りて）

點、短所に就いても十分に自省し、自警する心掛がなくてはならぬ。何事につけてもみづから顧み、己の短を知つて改めて行くものは、必ず自己向上の途に進むことが出來ると同じく、一國民としても、その國民生活に就いて長所、美點を自覺してゐる上に、缺點、短所を互に悟り、互に戒めるのは、又その國民生活を向上せしむる所以である。かやうに考へてくると、我が國民の道德意識に就いて、今後大いに反省し、改造すべき點は無いであらうか、我が國民の風俗、習慣、生活法に就いて改善を施すべき餘地は無いであらうか、或は立憲政治に關する諸般の問題に就いて、或は產業組織に關する諸般の事項に就いて改造を要すべき點は無いであらうか。こ

よつて（よりて）

れ等の事柄に就いて深く省み、深く戒め、進んで改めるところがなければならぬ。又學問、技藝に關して、從來我我國民の間から、如何なる大思想、大發見、大發明が出たか、世界文明の上に如何なる貢獻をしたか。この邊に就いても亦大いに熟考し、發憤せねばならぬものがある。

我我の從來の文明は、多くは外國の摸倣であつて、我我の創意に係るものは極めて少いといはれて居る。例へば文明の利器と稱せられる汽車、汽船、電信、電話、飛行機等は、何人によつて發明されたかを思へば、我等は從來あまりに摸倣的であつたことを顧みて、深く自ら戒めなければならぬ。成程西洋と交際をして彼等の文明に接したのは、まだ日の淺い

ことであるから、これまでの摸倣生活は已むを得なかつたとしても、既に維新以來六十年餘の歳月を經た今日に於いては、我我は自ら發奮努力して、進んで世界の文明に寄與する覺悟がなくてはならぬ。農業、商業、工業及び教育、學問等のいづれを問はず、凡百の方面に於いて、熱心に研究を重ね、修養を積み、努力して行かなければならぬ。希望は未來にあり、青年は未來に生きる。これ等の責任は、皆青年の雙肩に懸つて居る。大いに奮勵しなければならぬ。（大島正德―公民道德）

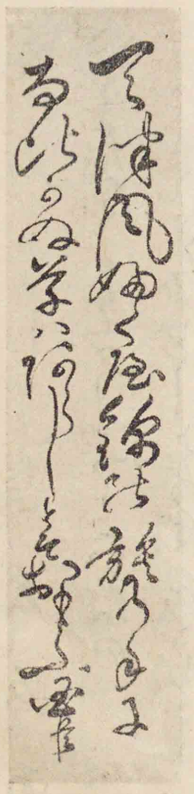
懸つて（懸りて）

大島正德　倫理學者。神奈川縣の人。東京帝國大學講師。

ふみわけよやまとにはあらぬ唐鳥の
あとを見るのみ人の道かは。（荷田春滿）

數ならぬ身にもうけつるたまものは
玉といだきてみがきあげてむ。（大西祝）

三　御階の櫻



平野國臣筆

孝明天皇御製

たゝなはる九重の
御階のさゝら風さわぐなり

平野國臣

大君のさきはまつらし我が命
いとゝすつるは身はまつらじ

孝明天皇　明治天皇の御父。第百二十一代の天子。

平野國臣　通稱次郎。福岡藩士。勤王家。元治元年斬らる。（一二五二四年）

天つ風ふくや錦の旗の手になびかぬ草はあらじとぞおもふ　國臣

久阪通武
吉田松陰門下の勤王家。通稱義助、字は元瑞。元治元年七月京都に自殺す。（二四九九年―二五二四年）

賴三樹三郎
勤王家。名は醇、鴨厓と號す。山陽の第三子。安政の大獄に斬らる。（二四八七年―二五一九年）

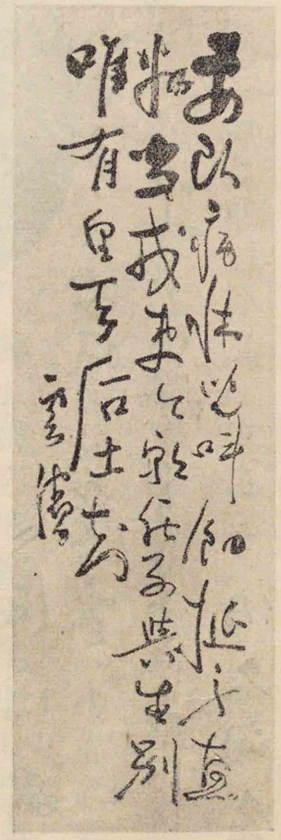
吉田松陰
勤王家。通稱寅次郎、名は矩方。長州藩士。安政の大獄に刑せらる。（二四八一年―二五一九年）

梅田雲濱
勤王家。通稱源次郎。若狹の人。安政の大獄に捕へられ獄死す。（二四七六年―二五一九年）

僧月照
勤王家。京都清水寺成就院の僧。安政五年十一月幕吏に追はれ西郷隆盛と薩摩の海に投ず。（二四七三年―二五一八年）

高山彦九郎
名は正之。上野國の人。寛政三奇士の一人。寛政五年六月筑後久留米に自殺

妻臥ニ病床ニ兒叫レ飢、挺レ身直欲レ當ニ戎夷ニ、今朝死別與ニ生別ハ唯有ニ皇天后土知ル。（ハシ ニハ ブ シテヲ ニス ラント ノ ニ ハ リニ ル ノ ル）



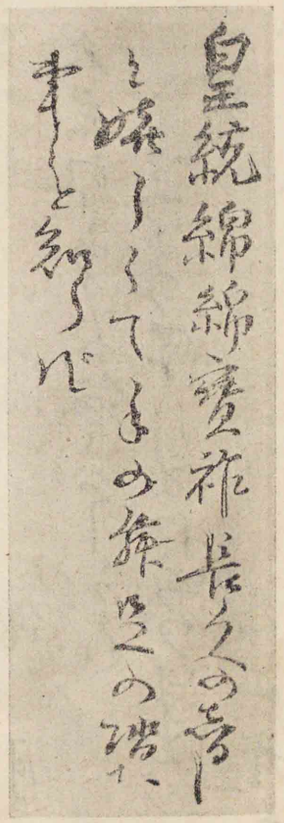
梅田雲濱筆

す。（二四〇七年—二四五三年）

皇統綿綿寶祚長久のしるしと嬉しくて手の舞足の踏む事を知らず

徳川齊昭
水戸藩主。烈公と諡す。萬延元年八月薨ず。（二四六〇年—二五二〇年）

佐久間象山
名は啓、修理と稱す。信州松代藩士。開國論を唱へし碩儒。元治元年七月京都にて刺さる。（二四七一年—二五二四年）



高山彦九郎筆

いまよりは心めぐらす花をみる
ゆめぐれつゝうつをきわび　徳川齊昭

あづさゆみまゆみつきゆみ引きあわど
この筒ろ〻〻よあるめや　佐久間象山

靈南阪
東京市赤坂區。伊藤公
公爵伊藤博文。當時樞密院議長なりき。（二五〇一年—二五六九年）

四　御前會議の夜

明治三十七年二月四日午後三時から、宮城に於いて御前會議が開かれて、遂に日露の開戰といふことに、廟議が一決しました。その夜六時過に靈南阪の伊藤公爵の官邸から、私に「卽刻來て貰ひたい、急に相談したいから」といふ電話が掛りました。

伊藤博文

私は直に靈南阪に驅け付けて、官邸の二階の公の書齋に這入りました。ところが公は、「テーブル」を前にして、安樂椅子に腰を掛け、唯腕を拱き、下を向いて、下唇を喰ひしばつて居

組んで（組みて）

られます。私が這入つて往つて、

「只今御電話でございましたが、何の御用でございますか」

と申しましたが、公はやはり兩腕を拱いて、下唇を喰ひしばつたまま默つて居られます。そこで私も、暫く佇立して無言で居りましたが、いつまで經つても、公から何の話も出ません。そこで再び私は、

「何の御用でございますか」と尋ねました。然るに、公はなほ無言で居られます。茲にお話をして置きたいのは、伊藤公は、國家の大事件に就いて心事を惱まされる時は、必ず腕を組んで、さうして下唇を喰ひしばつて居らるる癖がありました。それで今晩は何か容易ならぬ事があるのだなと、私は直

呼んで（呼びて）
載つて（載りて）

覺しました。それから又暫くして、私は三たび尋ねました。

「何の御用でございますか」と。さうすると公は、

「まあ其處へ掛け給へ。吾輩はまだ食事をせずに居る。君は」

と問はれました。私が、

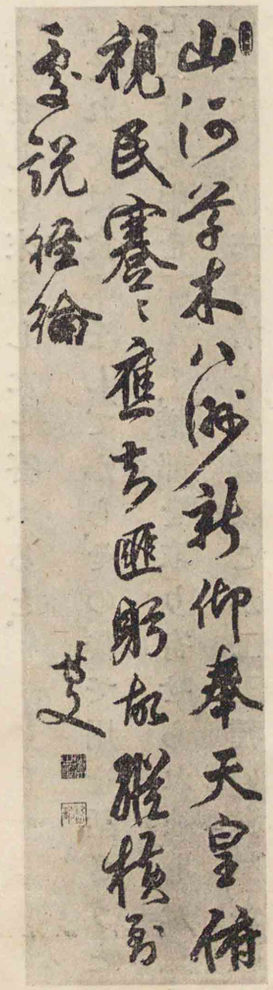
「濟まして來ました」と答へると、

「それでは食事をしてから、その後で用を話さう」といはれて、公は女中を呼んで、膳部を取り寄せられました。見ると、膳の上には、僅に煮肴とか、吸物とか二三種の食品が載つて居るだけであつて、そばに白粥が茶碗に一杯盛り添へてあります。公は漸くにして箸を取られたけれども、何物にも手を附けず、只白粥の中に食鹽を入れて攪き拌ぜ、それを食べ終

ると、すぐに膳部を下げさせられました。さうして、

「さて、これから君に御話をする。今日御前會議に於いて、數箇月間交渉を重ねた日露の大問題は、遂に干戈に訴へて解決する外はないといふ事に極り、國交斷絶の通告を露國政府に致した。實に容易ならぬ事であるが、外に解決の途がない。畏くも天皇陛下はこれを御裁可あらせられたから、吾輩も亦この難局に當つて、大いに力を盡さねばな

山河草木八洲新、仰奉ニ天皇一俯視レ民、蹇々應レ知聞ニ躬、故縦横到處説ニ經綸一。
博文



伊藤博文筆

天皇陛下
明治天皇。
大いに
（大きに）

往つて
（往きて）

らぬ。就いては君に米國に往つて大統領を始め、その國民に、日露開戰の經緯を説明し、一般の同情を得るやうに盡力して貰ひたい。これが今日の御前會議の決議の結果、元老も閣臣も皆均しく君に希望する所であるから、どうか承知して貰ひたい」といはれました。そこで私は、

「洵に御趣意はよく分りましたが、この重任は私の到底堪ふる所でありませぬ。從來の米露兩國の親密なる關係を考へますと、私の微力では、大統領と交渉し、その國民の同情を得ようなどといふことは、とても及ぶ所ではありません。閣下御自身より外に、その人はないと思ひます。それ故私は、ひらにこの任務は御辭退致したいと思ひます」

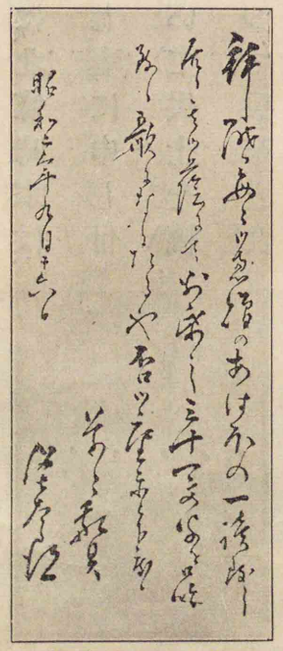
仍つて（仍りて）
ついて（つぎて）

と申した。所が、伊藤公は、

「吾輩は東京を離れることが出來ない。この開戰の決議と共に天皇陛下より『博文は朕が座右に在つて、この戰爭中は、外交その他重要の國務に就いて、朕を輔翼せよ』といふ敕諚があつたから、仍つて君に賴む次第である」といはれました。公は更に語をついで、

「元元今度の戰爭は、陸軍でも、海軍でも、勝つ見込が確立して居る譯ではない。不法の壓迫の爲に、已むを得ず國を賭して戰ふのであるから、君の任務が成功するの、せぬのといつて居る場合ではない。君が成功しないやうならば、吾輩が往つても、又誰が往つても成功しないであらう。どうか是非君に往つて貰ひたい。或は萬一我が陸軍が、朝鮮、滿洲で露國と戰つて、不幸にして日本の軍人が悉く屍を野に曝し、或は又我が艦隊が日本海で敗北して全滅するかも知れない、實に國家危急存亡の秋である。甚だ不吉の言を爲すやうであるが、もしさうした場合には、博文は兵士と共に海岸を死守し、敵兵には一歩たりとも我が國土を踏ませぬ決心をして居る。博文の爵位、財産、生命は皆天皇陛下の賜物である。そして君が爵位、君が生命、君が財産も、皆これ博文のそ

拜啓毎々御惠贈のあけぼの一讀致し居候其御蔭にて別帋の三十一文字を口吟致候歌になりたるや否御垂示被下度候　草々敬具
昭和二年九月十六日堅太郎



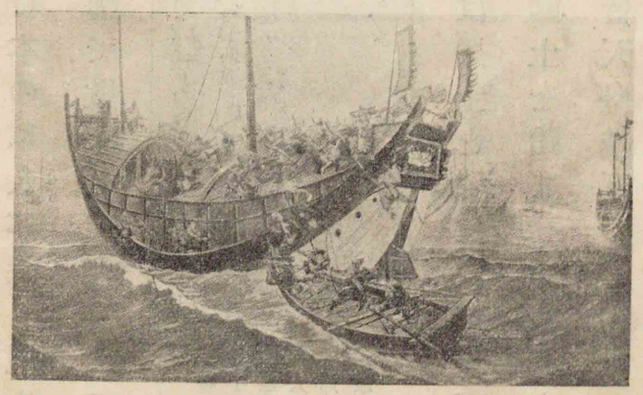
金子堅太郎筆

措いて（措きて）

元寇の九州に襲來　文永十一年弘安四年の二回。

北條時宗　北條第六代の執權。（一九一一年―一九四四年）

れと同じく陛下の賜物である。陛下の鴻恩に酬い奉るのは、今日を措いて他にその時がないから、御同樣、共に粉骨碎身、國家の爲に盡さねばならぬ。昔、元寇の九州に襲來した時に、北條時宗は、自ら身を卒伍に列し、妻に申し付けて『お前は粥を炊いて兵士を犒へ。自分は弓矢を取つて兵卒と共に國を守る』といつたさうだが、博文も亦決して時宗に遜るものではない。その際は吾輩の妻にいひ附けて、九州に來て粥を



蒙古襲來繪卷

金子堅太郎　子爵。法學博士。福岡縣の人。樞密顧問官。嘉永六年生まる。

炊かせる決心で居る。今日は最早、成功不成功を論ずる場合ではない。國を賭して、軍國の事に從ふべき時である。博文は生命を投げ出してやるから、君も亞米利加に往つて、死ぬ積りで働いてくれ」と、熱心に說かれた。

私も多年公の知遇を受けて居りましたが、この日のやうに熱烈なる言論を聽いたことはありませんでした。そこで私は、公にかう答へました。

「宜しい。成功不成功は問題でないならば、私も陛下の寵遇を辱うして居る身でありますから、今が卽ち御恩報じの時です。直に亞米利加に參りませう。

（金子堅太郎――雜誌國本）

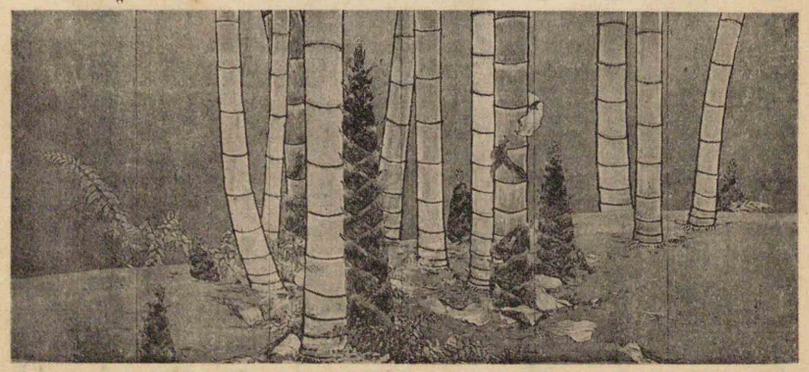
上つて（上りて）

五　筍

私の故郷の家には、地續きに小さな孟宗竹の藪があり、それから少し奥まつた邊に、やや大きい眞竹の藪があります。櫻の花が咲いて、空に思ひがけない春雷がごろごろ鳴ると、それをきつかけに、海では櫻鯛が網に上ります。その頃になると、孟宗藪には、あつちこつちに、もくもく土がもち上つて、赤茶けた産毛を生やした筍がひよつこり頭を擡げかかります。

「ああ筍が……」

私はそれを見つけた瞬間、いひ知れぬ歡喜に胸をふるはせたものです。筍は私にとつては、狗ころと同じやうに、短い産毛を生やした動物だつたのです。私は草履をはいたまま、垣のこはれから鰻のやうに藪のなかに滑り込みましたが、あつちでもこつちでも、筍の縮れつ毛の頭を見つけると、自分の踏んでゐる草履の下からも、今にもむつくり赤土がもち上りさうな氣がして、足の裏が擽ぐつたくて、たまらなかつたのを覺えてゐます。私はそこらの草を搔き集めて來て、一



竹の子（田南岳璋筆）

つかみづつそれを筍の上に被せてやりました。かうすれば通りがかりに竹藪をのぞいて見る惡戯つ兒の狡い眼からも遁れられるし、また日光をぢかに受けないですむので、中味の肉がながく柔かさを保つことが出來るしするからでありました。

のぞいて（のぞきて）

それからは、私は毎日幾度かこつそり藪へ滑り込んでは、人知れずどんなに筍の生長を樂しんだことでせう。親にかくれて物置小屋の狗ころを愛撫するのと同じ心持です。狗ころが見る度に肥つて行くやうに、筍もその度に寸を伸ばして行くやうに思はれました。實際筍の生長ほど目覺ましいものはありません。午前と午後とでは五寸以上も身丈が

違つてゐるやうな事もありました。私はそんなことをしてはならないと思ひながら、時時抑へきれない欲望に驅られて、筍の背を手のひらで撫で廻してみたり、又は肩へ手をかけて一寸搖ぶつてみたりしました。筍は強健な脊髓をもつてゐるやうにびくともしませんでした。

「大きくなれ。大きくなれ。」

私はかういつて土に生えたこの狗ころに向つて丁寧に挨拶しました。（薄田泣菫―太陽は草の香がする）

薄田泣菫　詩人。名は淳介。岡山縣の人。明治十年五月生まる。

新麥一斗、たかんな三本、油のやうな酒五升、南無妙法蓮華經と廻向いたし候。（日蓮）

白河天皇　第七十二代。
堀河天皇　第七十三代。
一切經　佛典の總名。大藏經ともいふ。
白河　京都の東部地方の稱。
法勝寺　天台宗。白河天皇の創建にて、洛東にありき。

六　大宮人と武士

雨を歴史上から見ると、種種面白い事があるもので、雨を恐れると恐れぬとが、その時代の世態、人情を表はしてゐるやうに思はれる。

白河天皇が御位を堀河天皇に御讓になつた後、佛法御信仰の餘に、一切經を紺紙に金泥でお寫させになつて、それが出來上つた時、白河の法勝寺で供養をなされる豫定であつた。所がその日になつて、大雨である爲に延期され、更にまた期日を定めたが、この時も亦雨だ。次に延期した日もまた雨で行幸が出來ない。都合三度延期したが、もはやこの上延期

逆鱗　天子の憤らせ給ふにいふ。韓非子に、「龍之爲レ蟲也、柔則可レ狎而騎レ也、然其喉下有レ逆鱗、徑尺、若人有レ嬰レ之者、則必殺レ人、人主亦有レ逆鱗。」

は出來ぬといつて、四度目に供養を行はせられたが、生憎その日も亦雨天であつた。

そこで、白河法皇は大いに逆鱗ましまして、

「怪しからぬ雨ぢや。速かに監獄へ送れ」と仰せられて、その雨を器物に入れて獄舍へ送られたといふことで、世にこれを「雨禁獄」といひ傳へてゐる。雨を禁獄した所で、何の效もあるまいが、かくまで逆鱗遊ばされたのを見ても、御外出の時、雨が如何に禁物であつたかが知られる。

萩野由之

外出の時は晴天がよいといふのは、普通の人情であるが、

昔の人の雨天嫌は又特別であつたので、今の人の想像も出來ない程恐れたものである。今一つの面白い例を次に擧げよう。

建久六年の三月、奈良に大佛殿の供養があつた。これは、聖武天皇の御建立遊ばされた大佛殿が、先年平重衡の南都征伐の時に兵火に罹つて燒失し、大佛の首も燒け落ちたといふ騷で、その後再建も出來なかつたのを、後鳥羽天皇の思召、又源頼朝の寄附や、俊乘坊重源などの勸化で、やつとこの度再建落成したので、天皇も行幸せられ、頼朝も鎌倉から上つて來て、供養に參列したのである。所がこの供養の日が大風雨であつて、參列の公卿百官、さては諸寺の僧侶たちも非常

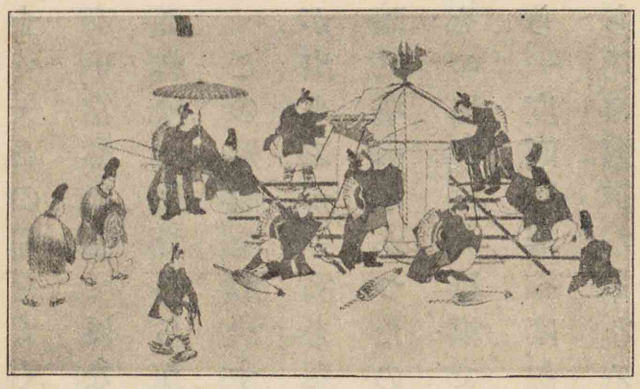
大佛殿　聖武天皇建立の金銅盧遮那佛を安置せる殿堂。

先年　治承四年十二月なり。

平重衡　清盛の子。一の谷の戰に義經の軍に捕へられ、後木津川に斬らる。（一八一六年―一八四五年）

俊乘坊重源　法然上人源空の高弟。（―一八六五年）

に困りきつてゐた。



行幸（雨儀）

然るに、頼朝護衞の武士達は、その大雨の中をびくともせず、列を正して密集してゐて、どこを雨が降るかといふ面魂で、平氣なものであつた。そこで京の人達は驚くまいことか、時の名僧慈圓僧正などは、その事を記錄に書きとどめて、「武士達は、皆雨に濡れることを何とも思はぬらしい」と、不思議さうに記してゐる。兵士が雨中に立つてゐることや、歩くことが何の不思議であら

慈圓僧正　天台座主。關白藤原忠通の子。文を好み、和歌に長ず。慈鎭と諡す。（一八一四年―一八八五年）

う。ことに鎌倉武士は、當時日本一のやうにいはれた武勇の士で、矢石の間をくぐつた者だ。雨中に立つぐらゐは何でもない。當然な話ではないか。然るに、京都人はかくの如く驚く。これは何故であらう。

この疑問を解決するには、種種な方面から説明することが出來るが、一例を擧ぐれば、當時の貴顯、紳士の服裝が第一雨に堪へなかつたのである。裁縫の仕方は暫く別としても、その地質は、大抵糊で張つて艶を出したものが多かつたから、一度雨に遭へば、忽ちだらりとする。折目正しい禮服も、忽ち見る影がなくなる。又その染色も、水に濡れると忽ち色が褪めもするし、他へ移りもするからたまらない。もと朝廷の

張つて（張りて）

大小禮は大極殿や紫宸殿で行はれたが、その時天皇は殿上に、文武百官は階下の廣庭に列立する例であつた。廣庭は青天井で、日覆もなければ雨覆もないから、雨の日には衣冠は形なしになる。それ故略式で濟ませる。こんな事情が續いて、次第に晴天でも略式を用ゐ、遂には朝儀も擧行しないやうになつたのである。

これは服裝の一例を擧げたに過ぎないが、しかし、かかる習慣が代代續いて來て雨に臆するから、身體も虚弱になり、氣性も柔弱になる。隨つて活動することなどは思ひも寄らぬやうになる。上流社會がこの通りであるから、上に倣ふ下で、下級の人民も段段勤勉することが出來なくなる。自然國

は衰へるのみである。

雨を恐れる所に亡國の氣分が漂ひ、雨の降るのも知らぬ風に、びくともしない所に新興の活氣が漲つてゐるではないか。これが卽ち平安時代の末に、朝權が日日に衰へて、武家政治が新に興つた所以である。もし殿上の公達も雨に恐れないで活潑に活動してゐたならば、政治の實權を武士に握られるやうな事がなかつたかも知れないのである。

（萩野由之――讀史の趣味による）

風群雲を拂ひさりて、雨も亦やみぬ。湖の上なる霧は、重ねたる布を一重二重と剝ぐごとく、東の間に晴れて、西岸の人家も手に取るやうに見ゆ。只木下蔭を過ぐる毎に、梢に殘る風に拂はれて落つる露碎けたる銀の如し。（森鷗外）

萩野由之　國史家。文學博士。新潟縣相川町の人。東京帝國大學、學習院、東京高等師範學校等に教授たりき。大正十三年一月歿す。（一二五二〇年―一二五八四年）

漲つて（漲りて）

七　ローマの空を飛ぶ

ローマ東京間大飛行計畫の詳細を知るため、ローマへ來て間もなく陸軍航空局を訪ねて見ると、暗夜に劍を磨するといふ姿で、著著として計畫を進めてゐる。

フェラリン中尉は、見たところまだ二十四五の若武者で、口をきりつと引き締め、若いに似合はず、先程から一言もいはず、默つて他人のいふのを聽いてゐた。一癖ありさうだわいと思つてゐたら、果してさうだつた。戰爭中ウイン空中攻擊の際に選ばれて參加した勇士の一人で、イタリヤ航空界に知れ渡つた有名な飛行家の一人ださうだ。この若い空中

ローマ　Rome　伊太利王國の首都。

ウイン　Vienna　オーストリヤの首府。

の勇士が始めて口を開いて、僕に向つていつた。

「どうです、これから行つて僕と一緒に飛びませんか。」

「僕はまだ一度も飛行機に乗つたことはないのです。」

「それならなほの事、是非これから行つて飛びませう。」

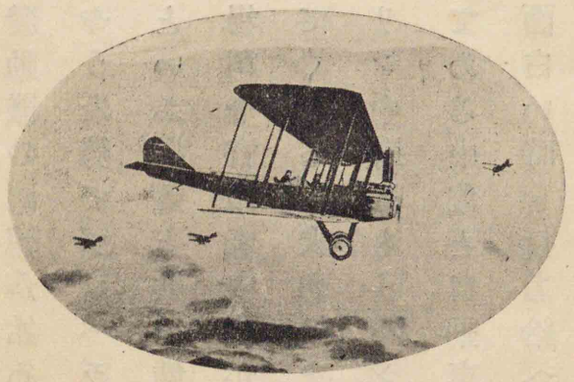
「それぢや……さうしませう……。」

といつてしまつた。

然り、いつてしまつたといふのが最もよく當つてゐる。これが日本であつたら、僕はまだ飛行機に乗る氣にはなれなかつたかも知れない。イタリヤでも、この活氣横溢の航空局の空氣をまづ以て吸はされなかつたら、こんな氣輕に飛ぶ氣になれたかどうか、自分ながら怪しかつた。

いつて（いひて）

見ると、格納庫の前に、蜻蛉形の小型の飛行機が三四臺出てゐる。いかにも小さい。見たところ頭から尾の端まで一二間の長さしかないやうだ。然し淡く澁でも引いたやうに、褐色に小ざつぱりと塗つて、きちんとしてゐる所は、如何にも嚴疊さうだ。これがイタリヤ自慢のスヴァ型飛行機で、速力の出るのと堅牢なのとで、戰鬪用、追擊用には最も適してゐるといふことだ。やがて僕等の乗るといふスヴァの一臺は、飛行工夫と兵士等とによつて、フェラリン中尉



飛行機

Propeller プロペラ

Handle ハンドル

指定の場所へ運ばれ、故障の有無を試驗するため、形の通り發動機の回轉が始められた。忽然として旋風が舞ひ起つたやうな勢で、プロペラは四邊に唸り響くこと約十五分。「よし」といふ掛聲と共に、僕は飛行服を著せられる。好人物さうな場司令官の老中佐が、最後に僕に頭巾を被せ、眼鏡まで懸けてくれる。人夫が腰を押して機の上へ乘せてくれる。フェラリン中尉はもうハンドルを握つて、いざとばかりに身構へてゐる。中佐と自動車で同乘して來た二人の將校とが、「折角面白い時を持ち給へ」といつて、最後の握手をしてくれる。然しこの瞬間、面白い時が持てさうな氣持は全然しなかつた。パリを立つ少し前に、イタリヤで大飛行機が墜落して、八九

喰つて（喰うて）（喰ひて）

人同時に死んだといふ新聞記事も頭に浮んで來た。運が惡いと、この儘落ちて死なないとも限らない。ええ、仕方があるものか。――かういふ風な考も、一度ならず僕の心中を往來したのは事實だ。

プロペラの回轉を暫く注視してゐた中尉は、間もなく片脚に力を入れてハンドルを動かすと、機はするすると滑走を始めた。滑走とはこの場合を形容するに最も適當な言葉だ。航空術の本場の西洋にも、この言葉だけはないやうだ。もの、三町も滑走を續けたかと思ふうち、機はふわふわと地面を離れ出した。大風の煽りを喰つて、大きな柏の葉などが地面からひらひら舞ひ揚るのを見ることがあるが、ちやう

どあれだ。氣持はただ譯もなく好い。機首を斜に上へ向けて、ぐんぐん昇天する。轟轟轟と、自分の鼻先四尺の近くに回轉するプロペラの轟と一緒に、夕立を浴びるやうに劇しい氣流が耳を掠めて吹き通す。

フェラリン中尉はと見ると、脇目もふらずハンドルを握つて、落ちつき拂つてゐる。操縱臺は板硝子で完全に氣流を遮つてゐるので、中尉は僕のやうに、飛行眼鏡を吹き飛ばされさうにして、絶えず頭に手を當ててゐる必要はない。初心の僕を驚かせない爲か、上つて行く角度は出來るだけ緩く斜にしたらしい。昇るに從つて下界が平面に見え出して來る。何もかも皆扁平に眼下に見え出した頃は、機はローマの

從つて（從ひて）

昇つて（昇りて）

市の入口近くの上から、中心目がけて走つてゐた。乘つて見て始めて知つたが、飛行機は空へ高く昇つてしまふと、走つてゐるやうでない。唯爆爆たる音を響かせて、少しづつ動いてゐるやうにしか思はれない。何といふ壯烈な感じだらう。僕は何といふ事なしに、口を引き締めて一人で點頭きながら、頭を下に突き出して頻に下界の景色を眺めたが、われ知らず押へ難い微笑が、こみ上げるやうに浮かんで來た。

浮かんで（浮かびて）

ふうん、ふうん。僕は幾度かかう獨りで感歎の聲を發すると同時に、名狀し難い嬉しさ心地好さが、こみ上げるやうに顏に出て來るのを覺えた。何の爲の嬉しさだらう。唯單に珍しく不思議な感覺を味つた爲であらうか。それとも僕の身

中を廻つてゐる數千年來の祖先の血が、始めて空を征服したといふ喜悅で、血球が躍るのだらうか。僕はたしかに興奮した。

下を見ると、ただ何もかも箱庭だ。市の中にゐる時は、樹木がなくて寂しく見えたが、上から見ると、家數よりも樹木の方が多く見える。停車場に玩具のやうな列車が入つて來る。大伽藍も大建築も皆一樣の點點だ。何よりも僕の注意を惹いたものはチベル河だ。ちやうど白蛇があわてて池の上を逃げる時のやうに、下では想像もつかぬ程うねり廻つてゐる。

チベル河 R.Tiber イタリヤの中部にあり。

市の上を一周して飛行場に近づいたと思ふ頃、機は急に

上を向いた。それが僕には一直線に逆立するかのやうに見えた。僕は思はずしがみつくやうにして、兩手で前の二本の柱を握つた。すると今まで、下に見えてゐた牧場や山が、反對に眼の上に覆ひかぶさつて來た。しまつた、落ちるんぢやないかたしかに墜落。

かう思つたが、それはほんの束の間で、次の瞬間には、機は一段の上空を悠悠と安らかに走つてゐた。そして中尉は再び僕を顧みてにやりと笑つた。いたづら者の中尉は、ちよつと僕を驚かす爲に宙返りをやつたのださうだ。最高度三千呎、約三十分の飛行を濟ませて、元の飛行場へ歸著した時には、やれやれと思つた。（鈴木文史朗——世界に聽く）

鈴木文史朗 本名文四郎。東京朝日新聞記者。

八　膽力の養成

男子と生まれた以上は、死生の境に出入しても、從容自若として更に動じないだけの膽力は持ちたいものである。膽力のあるものは、白刃眼前に閃き、危岩頭上に崩れ懸つても、悠然と濟ましてゐるが、膽力のないものは、天井から鼠の糞が落ちても、膽を冷し色を失ふではないか。

嘉納治五郎

膽力はその人の天稟にもよるが、また決して修養せられぬものではない。上杉謙信が十四五歳の時、大敵に追はれて

門番所の板敷の下に潛伏しながら眠つて居たとか、徳川光圀が六歳の時、暗夜に刑場に往つて死人の首を取つて來たとか、ネルソンが幼時から恐怖の何物たるかを知らなかつたとかいふのは、皆天稟と見るべきものであるが、修養で剛膽の人となつた例も亦決して少くない。

昔、武田信玄の部下に、岩間大藏左衞門といふ名代の卑怯者があつた。信玄は、どうかしてこれを矯正しようと考へて、或日の戰に彼を掩護物のない處に縛りつけ、敵に向つて坐らせて置いた。矢丸は雨のやうに飛んでくる、砲聲は雷のやうに轟く。彼はその怖しさに、殆ど死人のやうになつてしまつた。しかし、幸にも一つも矢丸が中らなかつた。そこで、彼は

ネルソン　英國海軍の名將。トラファルガーにフランス艦隊を破る。（西暦一七五八年―一八〇五年）

Nelson

向つて（向ひて）

戰つて（戰ひて）

依つて（依りて）

飜然として、運さへあれば矢丸も中らない、死は決して畏るべきものではないと悟つて、それからは戰爭ごとに勇み戰つて、遂に武名を揚げたといふことである。

大藏左衞門が戰を恐れたのは、彈丸雨飛の危險を過大視したからである。危險、災害の身に迫つた時、直にその結果を過大に豫想して恐懼狼狽するのは、神經質な人ほどあり勝のことである。ところが、平素修養あり、經驗あるものは決して恐懼狼狽することはない。消防夫が炎炎と燃えあがる猛火の中に泰然として立つのも、水夫が狂瀾怒濤の間に自由に働くのも、皆鍛錬と經驗とに依つて得た自信と覺悟とがあるからである。だから、なるべく多くの鍛錬と經驗とを積

却つて（却りて）

むことは、膽力養成の有力な方法である。

次には、あきらめるといふことが必要である。危險、災害等の來る場合に、なるべく安全に避けようとするのは、人の眞情には相違ないが、それが爲に却つて怯懦に陷ることがあるものである。最もわるい結果を身に引き受けても、是非に及ばぬと覺悟すると、膽は自然にすわるものである。例へば眞劍勝負をする場合に、まづ身を捨てる覺悟を極め、自分の骨を切らせて敵の命を取る

百物語

といふ風に、死身になつた上で手段と伎倆とを盡す方が、命を惜しむ者よりも自由が利くから、自然數倍の働をすることが出來る。

勝海舟は膽力に富んだ人で、白刃を踏みながら、談笑の間に天下の大事を決した英傑であるが、みづからその膽力を禪學と劍術とに依つて養成したものと信じて、左の如く語つて居る。

「自分は殆ど四箇年の間、禪學と劍術とを修業したが、德川幕府瓦解の時分、萬死の境に出入して、終に一命を全うしたのは、全くこの二つの功であつた。度度刺客かなんかに脅されたが、何時も手取にした。この勇氣と膽力とは、畢竟

勝海舟
名は安芳。伯爵。樞密顧問官。舊幕臣。海軍卿を經て樞密顧問官となる。明治三十二年一月薨ず。（一四九三年—一五五九年）

この三つに養はれたのだ。危險に際會して逃げられぬ場合には、まづ身命を捨ててかかつた。さうして不思議にも死ななかつた。ここに精神上の一大作用が存するのだ。急に勝たうとすると、忽ち頭熱し、胸跳り、措置顚倒し、進退度を失するやうな患が生ずる。又遁げて防禦の位置に立たうとすると、忽ち畏縮の氣が生じて相手に乘ぜられる。大小の事、皆この規則に支配せられるのだ。自分はこの精神上の作用を悟つて、何時もまづ勝敗の念を度外に措いて、虛心坦懷で事變に處した。それで、小にしては刺客、亂暴人の厄を免れ、大にしては瓦解前後の難局に處して、綽綽餘裕あることが出來た」と。

勝たう。（勝たん）

悟つて。（悟りて）

海舟は主として、劍術と禪學とで膽力を錬磨したのである。理窟の上から膽力を養成することは容易でないが、實地の修業において膽力の錬磨せられることは、殆ど人の想像以上である。（嘉納治五郎――青年修養訓）

嘉納治五郎
教育家、柔道家。兵庫縣の人。萬延元年十月生まる。元東京高等師範學校長。講道館長。貴族院議員。

鐵舟が將軍慶喜の命を受けて駿府の征討總督府に使した時の樣子を、後年、南洲が海舟に語つていつた。『山岡といふ人は、敵身方の觀念を超越してゐる。あの人が駿府の陣營に悠悠と入つて來たので、『敵軍の中を江戸から此處までどうして來られたか』と尋ねると、『やはり歩んで來た』といふ。『それは勿論だらうが、敵兵は見當らなかつたか』と聞くと、いや大勢の兵隊が行列してゐて、なかなか立派に見えました』と平氣なもので、まるで練兵でも見た氣でゐた。あんな命も金も名もいらぬ人間は始末に困る。然しこの始末に困るやうな人でなくては、共に天下の大事を語ることは出來ない」と。（逸話の泉による）

むかう（向ひ）

九 鯉

私はひとりで田圃むかうの田川に釣に出かけた。いつも行く川楊の下に腰をおろして、絲を長く堰下の水の青く澱んでゐるなかに垂れて、息をひそませてゐた。眞夏の夕べに近い日影が、土用芽を吹いた楊の梢を紅く染めてゐるのを、頭の上に感じながら、私は浮標にすべてを集注してしまつた。最初びくびくと浮標が動いたかと思ふと、微

釣　魚

狗尾草

澱んで（澱みて）

かなひびきを手に感じた。すぐに竿をあげると、三寸位の鮠が白く光つてあがつて來た。私は鮠の匂を涼しく感じながら、釣針からぬき取つて、そばに生えてゐた狗尾草（あのこぐさ）の莖を拔いて、それにあぎとをさし貫いて、岸の淺瀨に浸してから、また絲を垂れた。すぐびくびくと手ごたへがして、ぐつとあげると、もう銀色の鮠が岸の草の上に光つてゐる。私は前と同じやうに、狗尾草の莖にさして淺瀨に浸す。かうして私は十分か十五分程の中に、五六尾の鮠を釣り上げた。それでも私は滿足せずに、今までよりなほ專念に浮標を注視してゐた。自分が浮標だか、浮標が自分だか判らなくなるまでに、一つになつて、靜かに青く澱んでゐる水の上に浮いてゐるので

やうやう（やうやく）

ある。すると、突然浮標はずつと水底に沈んで往つたと思ふまに、強い牽引力を竿に感じた。私は思はず竿を上げようとしたが、絲がぴんと張つて切れさうになる。咄嗟にその絲を緩めると、今度は水底深く牽き込まれさうになるまで強く牽く。私はやむなく竿を土手に突き刺しておいて、靜かに絲を手繰り寄せた。思つたより簡單に手もとに寄つてくる。浮標の處まで手繰ると、水中の魚の姿がちらと見える。徐徐に手繰り寄せると、それは一尺五寸程もある白い鯉であつた。どこかの池から、洪水の時に逃げ出したのであらう。

私はやうやうの事で、鯉を土手の叢のなかへ投げあげた。草のなかで、ひたりひたりと跳ねてゐるのを、抱き付くやう

にして漸く捉へたが、大きいので狗尾草にはさせない。といつて他に何もさし物とてはない。私はどんな氣持だらうと思つて、内懷へ投げ入れて、著物の上からかるく抑へてしまつた。鯉は胃袋の少し下あたりに、ぬらぬらした肌をぴつたりと著けてゐる。著物の上から抑へられてゐるので苦しいのか、時時體をうねらせて、一はねしようと頻に試みる。私の腹は冷たく濡れて、川魚の水つぽい匂に、まみれる。青田を渡つてくる涼風が、兩方の袖口から脇腹に吹きぬけて、空を見ると、水のやうな夕月が光りそめてゐる。

私は懷の白い鯉を、庭の隅の水甕に放つ光景を想像して、すつかり樂しくなつてしまつた。（前田夕暮――綠草心理）

前田夕暮
歌人。名は洋造。神奈川縣の人。明治十六年七月生まる。

一〇　池野大雅

文人畫家として有名なる池野大雅は、甚だ奇行に富みたる人なりき。彼嘗て人に語りていはく、「われ若かりし頃馬術を習ひき。その時、師の言に、『汝武士ならねば、騎馬の法を學びても要なからん。されど羈旅のをり、輕尻馬などに乘りて、落つるすべを知らずば怪我すべし』とありければ、それより落馬の法を學びて、屢災厄を免れたり」と。又大雅がなほ若年にして父の業を襲ぎ、扇を鬻ぎて活計を立てし頃、その旅行の程に、節季に當りたれば、一族集まりて帳簿を調ぶるに、篆書もてしるしたれば解し難きに苦しみ、やうやう人を賴みて

池野大雅
名は無名、字は貸成。霞樵、九霞山樵等の別號あり。安永五年四月歿す。（一三八三年―一二四三六年）

整理を了へ、他日この事を以て大雅を誡めければ、その後は楷書にて認めたれど、なほ漢文にて帳簿にしるせりとぞ。

大雅かくの如く物に羈束せられず、奇行を以て稱せらるると雖も、彼はこれをもて故らに世を驚かさんとするものにあらず。その行爲は衒へるにあらで、その爛漫たる天眞より出でたるなり。されば頗る形式の末を輕んずれども、決して禮儀の誠意を失ふことなかりき。嘗て一豪富ありて揮毫を請ひしが、荏苒として久しくその望を果さず、使の至る毎に、「近日」とのみいひぬ。一日、使又來たりたれども、畫は未だ成ら

池野大雅

輕んず（輕くす）

怒つて（怒りて）

遠上寒山石徑斜、白雲深處有人家、停車坐愛楓林晚、霜葉紅於二月花。

九霞山樵寫

冷泉爲村

歌人。藤原氏。爲久の子。寶曆十年權大納言辭任。

ず。使門を出づとて呟きていはく、「咄この畫工、人を勞すること幾度ぞ。自負か、懶惰か、人を侮るか」と。大雅これを聞きて、急に使を呼び返し、「君が言ことわりなり。われ過てり過てり」とて、直に筆を染めぬ。又一門生の贋畫を作るものあり、大雅怒つてこれを逐ひ、罪を謝すれども赦さずしていはく、「貧は天のみ。恥を知らざるは人にあらず」と。その他、愛顧を受けたる冷泉爲村の恩を忘れず、爲村の病めるや、日日その門前に至り、病狀を伺ひて歸れりといふが如き、また母の歿するや、葬

池野大雅筆

るに當りて親らその棺を擔へりといふが如き、一として至情の發露せしものにあらざるはなし。

大雅の人となりかくの如く、大雅の畫もまたかくの如し。一見すれば、唯意志の奔放に任せて、一氣に塗抹したるものに似たりと雖も、更に熟視すれば、苦心の痕歷歷として畫面に溢るるものあり。大雅好んで名勝を遊歷し、見る所、觸るる所、これをおのが藥籠中にをさめ、山川の狀態、雲煙の變化、一一精察して至らざるなく、又よく古人の墨蹟を研究してその筆法を究め、而して後、漸く自家の特色を發揮せり。これを輕輕の筆といふは、眞に皮相の見に過ぎざるなり。

（藤岡作太郎―近世繪畫史）

好んで（好みて）

藤岡作太郎　國學者。文學博士。東圃と號す。石川縣金澤の人。東京帝國大學教授。明治四十三年二月歿す。（一二五三〇年―一二五七〇年）

一一　佛の化身

私は先頃一つの貴い傳說を聞いた。それは越後の北蒲原郡の乙村（きのこむら）にある乙寶寺（おつぽうじ）といふ古刹に參詣した時であつた。

相馬御風

その寺には有名な大日如來を安置した大日堂がある。その境內に先年特別保護建造物として指定された、何ともいへぬいい形をした三重塔がある。かの傳說はその三重塔の建立に關して、語り傳へられたものである。

その三重塔の建立は慶長十九年五月で、棟梁は京都の住

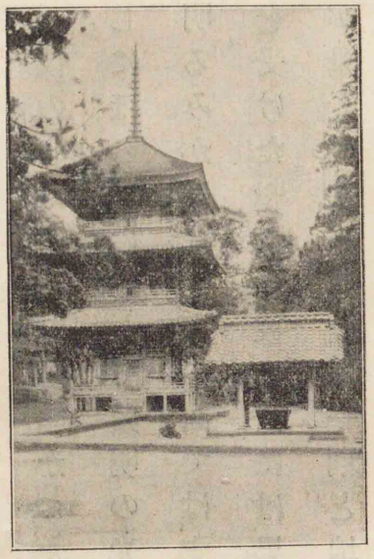
慶長　後陽成天皇、後水尾天皇の御代の年號。

人小島吉正である。その塔の建築には、さすがに有名なその棟梁も、心を痛め盡したといはれてゐる。どう工夫して見ても、うまく行かなかつた。とうとう彼は工事半ばに、絶望の極、夜逃をしてしまつた。どこへといふあてもなかつたが、彼は唯姿を晦ましさへすればよかつたのだ。

彼は眞暗な夜道をたどつて海岸へと出た。そして海岸に沿うて西へ西へと歩みを運んだ。眞暗な砂濱に打ち寄せる浪の音は、時にはこの世に望を失つた彼を誘ふやうにも思はれた。いつそあの暗い波間に飛び込んでしまはうかといふやうな突きつめた思も、幾たびとなく彼を襲うた。然し彼はやはり死ねなかつた。彼は唯むちやくちやに闇の中を歩

くのみであつた。

自分の生命を打ち込んで工事を進めて來たあの三重塔の失敗は、苟も藝術を自己の生命とする彼に取つては、正にこの世に於ける彼の滅亡に外ならなかつた。しかも彼はなぜかうしてその場を逃げ出して來たか。それを反省する時、彼は我ながらその卑怯を呪はずにはゐられなかつた。自己に對する呪は、やがて自己に對する憎みであつたけれども彼はその呪ふべき自己、憎むべき自己を闇の波底に葬つてしまふべく、



乙寶寺三重塔

なほそこに故知れぬ恐怖があつた。さういふ矛盾した心の苦しみは、只彼の心を狂はせ亂れさせるばかりであつた。今の彼の歩みは、全く狂へる者の歩みに外ならなかつた。

彼の心は底知れず暗かつた。然し、天地の闇はいつとはなしにほのぼのとして、黎明の光に照らされ始めた。ほのかに明るみかけた大海の面では、まづ波の穂の白いのが朝の光を受けた。やがて彼の前には、果しもなげに續いた廣い砂濱が見えて來た。光は刻一刻と地上の明るさを增して行つた。明け離れて行く海には、光を歡ぶが如く波が小躍してゐた。波間に浮いてゐた鷗の胸は、銀色に輝いた。夜露にしつとりと濡れた砂濱に、長く長く續いた彼の足迹、むちやくちやに

浮いて（浮きて）

闇の中を歩いて來た彼自らの足迹、――それさへも今は朝の光に照らされて、一條の長い道となつて現はれた。

さうした朗かな黎明の大地の上に立つた彼は、今は何もかも忘れはてて、只茫然とその美に醉うた。そして倒れるやうに、彼は大地の上へ全身を投げ出したのであつた。

それから幾時過ぎたか分らなかつたが、夢とも現ともなく、彼は耳もと近くに、子供たちの樂しさうな笑聲を聞いた。永い眠から醒めたやうに、彼はふらふらと起き上つた。すると朦朧とした彼の眼の前に、三人の子供が砂上に坐つて、何か頻にやつてゐるのが現はれた。何といふ譯もなしに、彼はその方へ吸ひ寄せられた。子供達は遊に夢中になつてゐる

歩いて（歩きて）

坐つて（坐りて）

造らう。（造らん。）

のか、彼の近寄つたことに少しも氣づかなかつた。が、その刹那、その憐れな建築師の疲れはてた兩眼には、突如として不可思議な輝きが現はれた。死んだやうになつてゐた彼の全身には、不思議な生氣が充ち溢れた。

三人の子供は石を澤山拾ひ集めて來て、それを積み重ね積み重ねして、塔のやうなものを造らうとしてゐるのであつた。彼等は今やすべてを忘れて、その事に全心をうち込んでゐる。甲が一つの石を置くと、乙は次に他の一つの石を積む。更に丙がそれに一石を重ねる。代る代る彼等はそれを續けて、著著として或一つの形を組み立てつつある。が、なかなかうまく行かない。積むと崩れる。崩れるとまた積み始める。

至つて（至りて）

幾度となく失敗し、幾度となく始める。しかも彼等は失望しない。倦まない、止めない、そして遂に或一つの纏まつた形ができ上る。すると、彼等は共に手を拍ち、聲をあげて喜ぶ。そして更にそれを崩して、また新に始めるのであつた。

さうした三人の子供の遊に飽かず眺め入つてゐた彼の絶望の建築師は、或瞬間に至つて、貴い何ものかを獲得したやうな確信に輝く面もちを以て叫んだ。

「そこだ、その呼吸だ。その組方だ。

そしてさう叫ぶや否や、彼は再び狂へる人の如く、もと來た道へと驅け戻つた。

さうした事があつて、漸くの事で出來上つたのが、今日見

るが如き端嚴微妙な姿をもつた乙寶寺の三重塔であるといふのが、傳說のあらましである。しかも傳說はそれに附け加へて、その三人の子供は大日堂の大日、藥師、彌陀の化身であつたといふのである。

「智慧は私達を子供にかへす。」とパスカルはいつた。私達は更に「子供は私達をほんたうの智慧に導く」ともいひ得よう。乙寶寺三重塔の傳說は、私にさうした貴い暗示を與へる。「子供は佛の化身であつた」といふその傳說の附會をも、私はそのまま受け容れるに躊躇しない。さうだ、すべての幼兒は神の權化であり、佛の化身である。（相馬御風――野を歩む者）

パスカル　フランスの數學者、哲學者。Blaise Pascal.（西暦一六二三年―一六六二年）

得ようの（得ん）

相馬御風　文學者。名は昌治。新潟縣の人。明治十六年七月生まる。

本居宣長　國學者。伊勢松阪の人。（一三三九〇年―一四六一年）

拍つて（拍ちて）

岡部先生　賀茂眞淵のこと。（一三五七年―一四二九年）

一二　眞淵と宣長

時は夏の半ば、「いやとこせ」と、のどやかに唄ひ連れゆく伊勢參の群も、春先ほどには騷がしからぬ伊勢松阪なる日野町の西側、古本の老舗柏屋兵助の店先に、「御免」といつて腰を懸けたのは、本居舜庵といふ、魚町の年若い小兒科醫であつた。醫師を業とはしてゐるものの、名は宣長といつて、皇國學の書やら漢籍やらを常に買ふこの店の常花客であるから、主人は笑ましげに出迎へたが、手を拍つて、「ああ、殘念なことをしなされた。あなたが、よく名前をいつてお出でになる江戸の岡部先生が、今の先若いお弟子と供を連れてお立寄

になつた」といふ。舜庵はいつものゆつくりした調子とは違つて、「先生がどうして此處へ」とあわただしく問ふ。

主人は、「何でも田安様の御用で、山城から大和とお廻りになつて、歸に參宮をなさらうといふので、一昨日あの新上屋へお著きになつた所、すこしお足に浮腫が出たとやらで御逗留。今朝はもうお宜しいので御出立の途中、何か古い本は無いかと、暫くお休になつて、參宮にお出かけになりました。」舜庵、「それは殘念なことである。どうかしてお目にかかりたいが。」「あとを追うてお出でなされませ。追ひ付けま

田安様　田安宗武。徳川吉宗の子。（一三七五年―一二四四二年）

無いか（無きか）

賀茂眞淵

せう」と主人がいふので、舜庵は、一行の様子を大いそぎで聽き取つて、あとを追うた。

あとを追うて松阪の市街を離れて、次の宿なる垣鼻村の先まで行つたが、どうもそれらしい人に追ひつき得なかつたので、すごすごと我が家に戻つて來た。

數日の後、岡部衞士は神宮の參拜を濟ませ、二見が浦から、鳥羽の日和見山に遊んで、夕暮に再び松阪の本陣新上屋に宿つた。「若し歸にまた泊られたなら、どうか知らせて貰ひたい」と頼んでおいた舜庵は、夜に入つて新上屋からの使を得たので、取るもの

追うた（追ひたり）

鳥羽　三重縣志摩郡。

本居宣長

訪うた（訪ひたり）

村田春郷　歌人。江戸の人。（一三九九年―一四二八年）

春海　歌人。織錦齋、又琴後翁と號す。（一四〇六年―一四七一年）

有德公　八代將軍德川吉宗。（一三二四年―一四一一年）

遊つて（遊りて）

も取り敢へず旅宿を訪うた。同行の弟子の村田春郷は二十五、その弟の春海は十八の若盛で、早くも別室にくつろいでゐた。衞士は仄暗い行燈の下において舜庵を引見した。

賀茂縣主眞淵、通稱岡部衞士は當年六十七歳、その大著なる冠辭考、萬葉考なども既に成り、將軍有德公の第二子田安中納言宗武卿の國學の師として、その名嘖嘖たる一世の老大家である。年老いたれど頗ゆたかな、この老學者に相對してゐる本居舜庵は、眉宇の間に遊つてゐる才氣を、溫和なる性格に包んでゐる三十四歳の壯年、しかも、彼は二十三歳にして京都に遊學して醫術を學び、二十八歳にして松阪に歸つて醫を業としてゐたが、京都ではただ醫術を學んだのみ

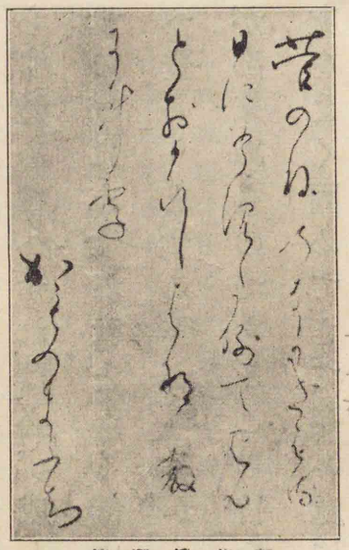
契沖　國學者。大阪の圓珠庵の僧（一三〇〇年―一三六一年）

喜んで（喜びて）

菅のねのながきはる日にそでたれて見んとおもひしはなほ散にけりかものまぶち

でなく、契沖の著書を讀破し、國學の蘊蓄も深かつたのである。

舜庵は長い間欽慕してゐた身の、ゆくりなき對面を喜んで、豫て志してゐる古事記の註釋に就いて、その計畫を語つた。老學者は若人の言を靜かに聽いて、懇にその意見を語つた。「我も固より神典を解き明らめんとの志であつたが、それにはまづ漢意を清く離れて、古の眞の意を尋ね得ねばならぬ。古の意を得んには、古の詞を明らめ得た上でなければならぬ。古の詞を明らめ得



賀茂眞淵筆

登らう。（登らん）

んには、萬葉をよく明らめねばならぬ。それ故、自分は專ら萬葉を明らめて居た間に、かくも年老いて、殘の齡いくばくも無くなつてしまつた。御身は年ざかりで、行先が長いから、怠らず勉めさへすれば、必ず成し遂げられるであらう。しかし、世の學に志す者は、とかく低い處を經ないで、すぐに高い處へ登らうとする弊がある。かくては、低い處をさへ得ることが出來ぬものである。この旨を忘れず心にしめて、まづ低い處をよく固めて、さて高い處に登るがよい」と諭した。

夏の夜は早くも更けて、家家の門の皆閉され果てた深夜に、老學者の言に感激して面ほてりした若人は、闇夜の道のいづこを踏むとも覺えず、中町の通を西に折れ、魚町の東側

村田傳藏　眞淵の門人、阪大學の通稱。

はひつて（はひりて）（はひいりて）

なる我が家の潛戸を這入つた。鄰家なる桶利の主人は律儀者で、いつも遲くまで夜なべをして居る。今夜もとんとんと桶の箍を入れてゐる。時にはやかましいと思ふ折もあるが、今夜の彼が耳には何の音も響かなかつた。

賀茂宇志迺教賜倍屢
皇御國迺上代乃道遠己痛願斯奴倍里。
故名簿乎進良世底其道爾赴比奴。伊摩
由後教賜敝留言。遂爾達里底。許流時爾
之毛有受波。安馱志人爾私言勢自。且宇
志爾對比底。爲耶無久異之伎心遠思波
自。都底此烏計非爾遠波婆。言麻久毛恐
伎。天津神國津神多知知志食奈毛。穴畏。

舜庵はその後江戸に便を求め、その翌年の正月、村田傳藏が中にはひつて名簿を捧げ、うけひごとをしるして、縣居の門人錄に名を列ねる一人となつた。爾來松

阪と江戸との間、飛脚の往來に、彼は問ひ、これは答へた。門人とはいへ、その相會うたことは僅に一度、唯一夜の物語に過ぎなかつたのである。

相會うた（相會ひたる）

今を距る百五十餘年前、寶曆十三年五月二十五日の夜、伊勢國飯高郡松阪中町なる新上屋の行燈の光は、かく相語つた老學者と若人とを照らした。しかも、その仄暗い行燈は、わが國文學史の上に不滅の光を放つて居るのである。

（佐佐木信綱――賀茂眞淵と本居宣長）

佐佐木信綱　歌學者。文學博士。伊勢の人。竹柏園と號す。明治五年生まる。

勞苦をして遊戯の如く樂しからしめよ。最高の勞苦をして最高の愉悅であらしめよ。さういふ境地を、この人生の錬金術を眞の藝術家ばかりが知つてゐる。遊戯をして最も嚴肅なものであらしめよ。勞苦をして最も愉快なものであらしめよ。かうしてこそこの人生にも生きがひがある。（佐藤春夫）

一三　笑話三則

一、熊の彫物

米國の或鐵道の社長殿が、公園を散歩してゐると、薄暗い木蔭で年とつた一人の印度人が、あり合せの木片で鳶色の熊をせつせと刻んでゐるのを見つけた。

刻んで（刻みて）

社長は、見てゐるうちにいい事を考へついた。それは鐵道會社經營のホテルや、公園の休憩所の所所に、この熊の彫刻を飾りつけて置いたなら、どんなにか人目を樂しませるだらうといふ事だつた。

ホテル　Hotel

「爺さん、幾らだね。これは。

社長は杖のさきで出來上つた熊の彫物を指しながら訊いた。

「一つ五弗しますだ。

印度人はせつせと小刀を動かしながら答へた。

「わしはこれを二三百欲しいと思ふのだが――。」社長はこの見すぼらしい藝術家の救主であるやうな滿足さをもつていつた。「それだけ註文すると、一つ幾らにしてくれるね。

爺さんは初めて眼をあげて、自分の前に白樺の木のやうに立ちはだかつてゐる紳士の顔を見た。その眼にはやや當惑の色が見えた。

「そんなにどつさり註文してくれるなら、旦那さま、一つ七

弗五十仙づつにしときませう。

「七弗五十仙。それは又なぜだ。

「これを二三百も作らなければならぬと思ふと、思ふだけでもいやになりますからなあ。（薄田泣菫――猫の微笑）

二、命令法

ウッド Woode.

アメリカのウッド將軍が小學校に通つてゐた頃、ある時、教師の一人が將軍の名を呼んで起たせた。

「あなた、何でもいいから短い文句を一ついつて御覽なさい。そしてそれをどんな風にいひ換へたなら、命令法になるか、ためして

引いて（引きて）
短い（短き）

見ますから。

「馬が車を引いてゐます。

少年は鸚鵡返しに短い文句をいつた。後後は名高い將軍になるだけあつて、すぐに馬を思ひ浮かべたらしかつた。

「よろしい。それを命令法にいひ換へると……。

未來の將軍は、腹一ぱいの聲でわめいた。

「前へ――おい。（薄田泣菫――猫の微笑）

マアク・トエン　Mavk Twain　米國の諧謔作家。
ヨット

三、島

諧謔作家マアク・トエンが、ある時ヨットに乘つて航游してゐたことがあつた。波の荒い日で、さすがの諧謔作家も青い顏をして、何一つ物をいはないで、欄干に凭れたまま泣き

Boy　Yacht
ボーイ　快走艇。

出しさうな目をして、ぢつと波を見つめてゐた。

食堂のボーイは心配して、主人の顏をのぞき込むやうにして訊いた。

「大分お苦しさうですが、何か持つて參りませうか。

諧謔作家は咽喉を締められた鷗のやうな聲を出した。

「小さくつていいから、島を一つ持つて來てくれ。

（薄田泣菫――猫の微笑）

船頭かはいや音戸の瀨戸で
一丈五尺の櫓がしわる。
沖の闇いのに白帆が見える
あれは紀の國みかん船。

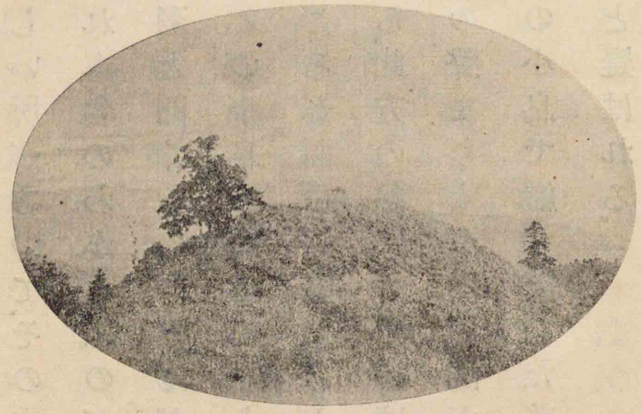
湖水 琵琶湖を指す。

突つ立つて（突き立ちて）

一四　比叡の鳥

寢床を出て、齒磨楊枝を使ひながら、湖水の見える部屋に往つて見た。朝日が部屋一面にはひつて居る。湖水と思はれる邊は、雲ばかりで何も見えぬ。富士の頂上から雲海を見下したのと似た景色だ。部屋の下は東谷になつて居るので、我が眼よりやや高く、やや低く、無數の杉の梢が、鉾のやうに突つ立つてゐる。左手には北谷の向に當る峯が、鋸の齒のやうな杉を背にならべて湖の方に流れて居る。空氣が清いうへにも清いので、近景の杉の梢も、遠景の杉の森も、新鮮な色をしてゐる。さうして、その間を薄い霞が流れて居る。非常に靜

囀つて（囀りて）



比叡山頂より湖水を望む

かだ。自分の呼吸の外、浮世の物音は何も聞えぬ。

ただこの天地をわが物顔に啼き囀つてゐるのは小鳥だ。何といふ可愛い聲であらう。名がわからぬのが殘念だ。そこの杉の梢で一羽啼いて居る。彼方の杉の梢で他の一羽が答へてゐる。又、はるか向の谷深く他の一羽が應じてゐる。よく耳をすますと、なほ二三羽の聲がどこかで聞えるやうだ。また、その小鳥の合奏を破るやうに、他の聲の小鳥が突然その間

優しい。（優しき）

浸みこんで（浸みこみて）

に高音を張る。前の小鳥ほど優しい聲ではないが、また凜凜しい所があつて、その音の空山に響く趣が何ともいへぬ。これも名のわからぬのが殘念だ。それも一羽ではない、三羽四羽と聞くうちに、だんだん殖えてくる。前の小鳥が縱絲なら、この小鳥は横絲のやうに、互に錯綜してよく調和を保つところが面白い。突然、けんけんと、けたたましい音が谷を横ぎる。此方の谷にも響けば、彼方の峯にも響く。昨日聞いた雉子の聲よりもやや急調だ。多分山鳥ででもあらうか。前の二つの小鳥で織り成した美しい絹を、ただ一聲にひき裂いたかと疑はれる。

暫くしてその聲は、谷の底の底、峯の奥の奥に浸みこんで

織つて（織りて）

漂うて（漂ひて）

しまつて、そのあとは元のとほり靜かになる。眞先にその靜かさを破るものは鶯の聲だ。絹に置かれた絣のやうに美しい。一つの絣が置かれると、又縱絲を織つて前の小鳥が啼く。又横絲を織つて次の小鳥が啼く。絣が啼く、縱絲が啼く、横絲が啼く。この美しい絹を、又山鳥の聲が破るのかと思ひながら待ち設けて居ると、不思議な聲が別に起る。それは、麓の里の池できく蛙の聲によく似てゐて、谷の神社の鰐口が口をあけて呟くのかとも疑はれる。他の鳥の聲聲が、皆高調で晴晴とした中に、獨、低調で不平らしい音を出すのが面白い。友は、「啄木鳥だらう」といひ、他の者は、「山鳩だらう」といつた。

琵琶湖の上には、まだ漠漠とした白雲が漂うてゐる。杉の

梢を流れる霞は少しづつ薄らいで來て、だんだんと谷が深く見えてくる。（高濱虛子）

薄らいで（薄らぎて）

高濱虛子　俳人。愛媛縣松山の人。名は清。明治七年二月生まる。

海水浴に行きたらば、試みに浪打際を歩きて見よ。而して一二町歩きたらば、ふり返りて見よ。必ずや御身の足迹は、あつちへ曲り、こつちへ曲りして、一直線には成り居らざらん。若し數人いひあはせて、直線の足迹を印せんことを競はば、われ請ふ、御身に一祕訣を授けん。祕訣と云へば、むづかしきやうに聞ゆれど、別にむづかしきことは無し。唯前方に一の目的物を定めて、わき眼もふらずに、それに向つて歩け。さらば御身の足迹は、直線となりて連らん。

社會を歩むも亦此の如し。心にしかとしたる信念を懷きて、それに向つて進め。さらば、その言正しく、その行正し、その人正し。左支右捂することなくして、正しき路を濶歩することを得ん。（大町桂月）

一五　舊師におくる

この寺　靜岡郡安倍郡不二見村新定院。

踏んで（踏みて）

敬啓。この寺に來たりてより早くも十日を過ぎ候。午前は經机の上にて横文字の本を讀み、午後は手拭をさげて泳ぎにゆく外、變りたる事もなく、夜は時時村の子供達六七人遊びに參り、月を踏んで共に唱歌したり本堂の縁に踞して小生の話す御伽噺を聞いたり致し候。泳ぎにゆく時も、彼等は粟の穗、桔梗の花、鳥の羽などを耳にはさみて隨行致す事これあり、沿道目に觸るる草木昆蟲を、一一指點して小生に敎へくれ候。その爲この頃は大分博識に相成り、ちんちろ柿といふのまで覺え候。

連日晴天の爲、田の水涸れ、小生の居る村にても、雨乞の祈禱始まり候。祈禱者は一七日の間一切火食せざる由にて、終日、注連繩をかけたる竹の下にて鉦を打ち、竹法螺を吹き居り候。

小生の居る座敷は、富士は元より、鄰家の桑圃すら見えず、狹き庭に密生したる芭蕉、棕櫚竹、高野槇、梅、山茶花などに遮られて、僅に空の色を望むに止まり候。只晩涼微風と共に生ずる時は、一庭の脩竹竿竿相磨し、葉葉相觸れて幽興の掬すべきものなきにあらず候。龍華寺も近けれど、小生は鐵舟寺の碧蓮を愛すること更に深く、屢その本堂の欄によりて、蓮香月色共にほのかなるを賞し候。

棕櫚竹

龍華寺　日蓮宗。靜岡縣安倍郡不二見村。

鐵舟寺　禪宗。同處。

ブラウニング　英國の詩人。テニソンとその名聲を競ふ。（西暦一八一五年―一八九九年）Browning.

鷗外先生　森林太郎。島根縣濱田の人、文學博士、醫學博士。陸軍軍醫總監、帝室博物館總長。大正十一年七月歿す。（二五二〇年―二五八二）

江尻　靜岡縣庵原郡。

清水　同縣安倍郡。

芥川龍之介　文學者。東京の人。昭和二年七月歿す。（二五五三年―二五八七年）

ブラウニングはやめに致し候。その代りに鷗外先生の作品を色色讀み候。皆面白く候へども、中にも「意地」の一卷を何度も讀み返し候。毎日海水を少しづつ飲むのと、鹽からき御菜を食ふのとの爲に、甘い物が戀しく、江尻、清水の菓子屋は涉獵し盡し候。そろそろ鄕愁が起り候へば、その内に歸京のつもりに候。　不悉。

（芥川龍之介―芥川龍之介全集）

漕ぎぬけて川下に見る花火かな　（青青）
軒高うつりて見まさる金魚かな　（乙字）
眞白なる猫木にのぼる青あらし　（碧童）
浮草のうかぶ水なき暑さかな　（水巴）

尾崎喜八
詩人。東京の人。明治二十五年十一月生まる。

フットボール Football.

歸つて（歸りて）

遠い（遠き）

一六　西瓜

（尾崎喜八）

夏の夕日をはすかひに受けて、
ほんのり紅みのさした眞青な西瓜が、
涼風のたちそめた畑のなか、
其處にも此處にもごろごろしてゐる。
まるで天から落ちた神樣のフットボールのやう。
それを見わたす窓の内部で、
私の一日の仕事は終つた。
友達の畫家は、
炎天の野の寫生から歸つて來た。

天は海のやうに澄んで、
西方にむらがる雲が、遠い國の島島を思はせ、
木立も空間も蜩の歌で滿されてゐる。
妻よ、その西瓜を一つ、
裏の家からもらつて來い。
さうして、勤勞の一日につづく慰めの時間のため、
爽かな大皿の上ですぱりと切れ！。（日本詩集）

泰山木の花は白蓮に似て更に清らかである。祕かに開いて祕かに散りゆく月魄のやうなこの花は、かはたれ時に生まれた白い大きな蛾が、うすら明りにその翅をゆらめかすかと思はれる。いやこの花のよい所はそんな比喩によつて何物も現はされて居らぬ。暗示そのものである。冷艶そのものである。（前田夕暮）

輕井澤
長野縣北佐久郡の高原にして氣候清涼、避暑の好適地なり。

一七　月見草

月見草は私の好きな花の一つである。取り放していへば、黄色は自分の特に好きな色の部類に屬してゐるものではないが、あの花瓣の柔かさと、あの清新な鮮かさと、又その花を見る夕暮や曉のすがすがしさとは、月見草のほのかな黄色をいひ難く懷かしいものに思はせるのである。

自分は一昨年の夏、輕井澤で見た月見草の野原を忘れることが出來ない。朝まだ暗いうちに、狹苦しく滿員になつてゐる停車場前の旅亭を出て、同宿の友と新舊兩市街の間の野原を歩いた。月見草が曉に近くいくらか萎れかかつて限

續いて（續きて）

脹らんで（脹らみて）

もなく咲き續いてゐる上を、山の霧が廣く流れてゐた。自分達は言葉ずくなに竝んで歩きながら、何ともいへず親しい氣持になつて旅舍に歸つた。

今自分の家にも一株の月見草がある。二三日前の夕暮、私は月見草の咲くところを目のあたり見た。

二階の欄干に凭つて食後の煙草をふかしてゐると、庭の月見草の蕾が急に脹らんで來るのが見えるやうに思はれた。昔の人が蓮の花の開く音を聽いて悟を開い

月見草

たといふ話を幽かに想ひ起しながら、急いで庭に出て、月見草の傍にしやがんで見てゐると、如何にも今咲きかけてゐる蕾の幾つかがある。最初に花瓣を包んでゐる萼が後退りを始める。萼が開くと卷かれてゐた花瓣が次第に脹らんで來て、不意に一ひらがはじける。さうすると四つの花びらが一緒にふわりと開いて來て、遂に蕊を見せて咲いてしまふのである。その咲きはじめに、ほのかな香氣が鮮かに鼻を打つ時の氣持は、なんともいはれない。明日の朝になれば萎んでしまふ果敢ない花ではあるが、咲く時の新しさは、それだけに格別なのかも知れない。

私のやうな者には、月見草の咲くのを見ても、固より悟は開いて（開きて）

開けない。然しそれでも、新しく咲く花を見まもる靜かな愛の心は、本當にあり難いものであつた。（阿部次郎―北郊雜記）

阿部次郎　哲學者。明治十六年八月山形縣に生まる。東北帝國大學教授。

壁書

一、苦は樂の種、樂は苦の種と知るべし。
一、下人は足らぬものと知るべし。
一、恩を忘るること勿れ。
一、子ほどに親を思へ。
一、掟におぢよ、火におぢよ。分別なき者におぢよ。
一、朝寢すべからず。
一、分別は堪忍なり。
一、小なることは分別せよ。
一、大なることは驚くべからず。
一、九分は足らず。十分はこぼると知るべし。（德川光圀）

本多正信
三河の人。佐渡守と稱す。家康の謀臣、後幕府の執政となる。元和二年五月卒す。(一一一九八年—一二一七六年)

上野介
名は正純。幕府の執政となり、後罪を得て出羽に配せらる。寛永十四年四月歿す。(一二二七年—一二九七年)

大殿
家康をいふ。

濱松の城
靜岡縣濱名郡。

一八　人の諫

本多正信、或時嫡男上野介に語りけるは、『昔、大殿濱松の城にましましし時、ある夜外樣の侍三人御前に召されて、仰を蒙ることありて罷り出づ。その中に一人とまりて、懷より一封の書を取り出し、みづから封を切りて奉る。『それは何ぞ』と仰せらるるに、『これは某、年ごろ諫め奉らんと存ずる所を書き列ねたるものにて候ふ。よき序なれば奉るなり』と申す。殊に御心地よげにて、『それにて讀み候へ』と仰せらる。一條を讀み終るたび毎に、『申す所ことわりにこそあれ』と仰ありて、十餘條を讀み終へて後、『我を諫めんこと、この度に限るべからず。この後も思ふ所あらんには憚る所あるべからず。汝が志のほど神妙の至なり』と感じ仰せ下さるるに、彼の人悅びに堪へずして罷り出づ。正信御前に在りけるに、『唯今の申し條、いかに聞きつるぞ』と仰あり。『事皆細碎にして國家の大務にあらず。殿の用ゐさせ給はんことは一條もなしと承はり候ひぬ』と申すに、御手を振らせ給ひて、『いやいや、彼が智を竭して思ひ謀れる所なり。その智の拙きは如何にせん。彼が年頃時を得て我を諫めんと思へることこそありがたけれ。世の人みづから我が過を知ること

本多正信

多からず。過と知りなば誰か過つべき。善しと思ひ誤るより過はあるなり。卑しき人は親族、朋友互に諫め爭ふことあれば、過をも知りて改めつ。これ卑しきが一つの益なり。位貴き者には親族も交疎く、まして朋友といふものもあらず。朝夕日夜、我が前に伺候する者は、如何にもして主の心に逆はざらんことをこそ思ひはかれ、いかでその過を正さんと思ふ暇あらんや。たとひ稀有にして諫めんと思ふ者ありとも、その過の大いならん事をこそいはめ、少しの事ならんには、さて止みなん。すべては、少しなるが積りてこそ大いなる過にもなれ。過既に大いなるに至りては、いかに悔ゆとも及び難きこともあるなり。されば我が聽く程のこと、皆耳に逆ふこ

となく、一生我に過ありといふことを知らで過ぎぬ。これ高きが一つの損なり。古より家を滅ぼし、國を失ふも、皆諫を聞くことなくて、我が過を知らざるが故にあらずや。この事を思ふに、たとひいかなる僻事ならんにも、我を諫むることならんには、皆忠言とこそ思ふべけれ」と仰ありき。あり難き御心なりけり」と、頻に涙を流して語りけるに、正純聞きて、「その人は誰ならん。又いかなる事をか申しけん」といふ。正信聞きて氣色を損じ、「その申しし事も、その人をも、汝が聞きて何の益かあるべき」と答へきとなり。この問答にて、父子の相遠きこと量り知るべきにや。（新井白石――藩翰譜）

新井白石
名は君美。通稱勘解由。木下順庵門下。德川家宣に仕へて輔翼の功多く、筑後守に任じ、後致仕して著述に勉む。享保十年五月歿す。（一六五七年―一七三八年）

眠つて（眠りて）
見よう（見ん）
驚いて（驚きて）

一九　兒獅子

或日兒獅子が母獅子の眠つて居る間に、森の中で獨遊び戯れてゐた。種種變つたものが氣を引くので、兒獅子は一寸周邊を探檢して見ようといふ心になり、自分の住家の外の世界はどのやうなものかを見極めようとした。やがて兒獅子は遠くにさまよつて歸路を見失ひ、何時の間にか迷兒になつてしまつた。

兒獅子は驚いて、氣も狂はしく八方に走り廻り、悲鳴を揚げて母を呼んだが、母の答は無かつた。疲れ果ててせんすべもなくなつた時に、ちやうどこの頃兒を失つた親羊がこれ

送つて（送りて）

に出遇つた。羊はあはれな啼聲を聞き附けて、兒獅子の近くに來て、優しく色色と世話してくれた上、遂にその兒獅子を我が養子として引き取つた。

羊はこの迷兒を能く愛撫して育てたが、その内にそれが親羊よりも大きくなり、時には何だか薄氣味惡く見ゆるやうになつて來た。その眼の底には、羊の合點のゆかぬ不思議な光を見る事も度度であつた。

當座の内は、養母と養子と、共に幸福な月日を送つて居たが、或日、向の山の彼方に、空を壓して大きな一頭の獅子が雄姿を現はした。獅子はふさふさとした鬣を振つて、木魂となつて谿谷に鳴り響くやうな吼聲を發した。母の羊は恐れ戰

新しい。（新しき）

いて立ちすくんだ。然しこの不思議な音響が兒獅子の耳に達した時に、兒獅子は魔に打たれたやうに、これまで嘗て覺えない感じがして、全身が活活と跳り上るやうな氣がした。その獅子の吼聲は兒獅子の心の底の琴線に觸れて、或新しい威力を感じさせたのである。さうして新しい不思議な自覺が發生したのである。

兒獅子はその獅子の吼聲に應じて吼え返した。さうして恐怖と驚愕との念に充ちて慄へながらも、一旦勃然として起つて來た新しい力は抑へ難くて、遂にその情深き母羊を名殘惜しげに見やりながら、驀地に向の山の獅子の方へ飛び去つた。

思つて（思ひて）

迷兒の獅子は自己を發見したのである。この時まで迷兒の獅子は、母羊の傍に遊び狂つて居た小羊達が爲し得ない事が出來るとか、普通の羊に比して格別勝れた力を持つて居るとかいふやうなことは、夢にも想像しなかつたのである。まして山中の百獸を慴服せしめるやうな威力が、おのれにあらうなどとは想像もしなかつた。彼の考は只單純な羊の考で、犬が見えたらば逃げ、狼の哮えるのを聞いては戰慄するものとしか思つてゐなかつた。然るに、今はこれ等の犬や狼が、おのれの姿を見て直に逃げ隱れるに至つたのを知つて、却つてみづから驚いてゐるのであつた。

兒獅子もみづから我は羊なりと思つて居た時には、羊の

あつても（ありても）

如く臆病で因循であつた。隨つて羊だけの力と勇氣しか持たず、到底獅子の力を出し得なかつたのである。たとへ他から敎唆するものがあつても、「なかなか獅子の力など出せるものか。僕は普通の羊である。普通の羊と異なるところは無い。他の羊の爲し得ぬものは、僕にも到底出來ぬのだ」といふに止つた。然るに獅子といふ自覺が出來た今日、この兒獅子はここに心機一轉して、威風四鄰を壓するが如き勇猛の動物となり、遂に山中に於いても、豺と虎との外には競爭するものもない森の大王となつたのである。自覺は確かに彼の力を二倍にし三倍にし、或は幾層倍にしたか分らない。この力は彼が獅子の咆哮を聞く前の瞬間までは、到底認められなかつたのである。

マーデン　アメリカの哲學者、著述家。Marden

兒獅子は自覺を喚び起した。向の山の獅子の咆哮が無かつたなら、兒獅子は永久羊の生涯を續け、遂に自己の內に潛在する獅子の本性を悟らずして終つたのであらう。さればとて、獅子の咆哮は彼の力に一物をも加へた譯ではない。單に內にあつたその偉力を喚び起し、おのれに持つて居たその勇猛心を喚び醒ましたのみである。然し既にかかる自覺が出來た後は、兒獅子は最早羊の生涯に滿足し得られなかつた。山野は實に彼の意のままに跋涉する處となつた。

（マーデン――如何にして希望を達す可きかの譯に據る）

二〇　人の香

昨日、或席上にて一場の談話を求められ候ひしまま、「人の香」といふ演題にて、花ならば梅たり、薔薇たり、蘭花たらんことを人人に求め候ひき。今、茲に少年諸君の爲に、更にこの趣旨を開陳致したく候。

山野に花卉少からずと申せども、香芬あるものは多からず。しかも香芬あるものは、藪澤の中にありとも人のために認めらるべく候。これと同じく、人も亦香氣あるものとならんことこそ願はしく候へ。人の香氣とは、その才智藝能に伴ふところの崇高なる精神を申すにて

候。苟もこれあらんか。その事業の大小を問はず、必ず生命あり、色彩ありて、人を動かし人を感ぜしめ、人に認めらるべく候。

さて人の香氣は何より來たるかと申し候に、自敬の念より來たることを忘るべからず候。自敬とは、みづから尊大に構ふる譯にてはこれなく、自己が自己に對して敬意を表することに候。

竹越與三郎

この身惜しむべしと思ふ一念に候。眇たるこの身も、天地の精靈を宿したる一塊なれば、大いに發しなば如何なる働を爲さんも知るべからず候。然るに目前の劣等

君子は獨行影に恥ぢず　宋史に出でたる語。

君子は惡木の蔭に宿らず　管子に、「士懷ヲ耿介之心ヲ、不レ蔭ニ惡木之枝ニ」。

アレクサンドル大王　マケドニヤ王。四方に遠征し、ギリシヤ、シリヤ、ペルシヤ、埃及、印度を征服し、バビロンにて病歿す。(西暦前三五五年―前三二三年)　Alexander the Great

日野阿新丸

なる慾情に追はれて、尊からぬ所業を爲さんは恥しき限に候。「君子は獨行、影に恥ぢず」と申すも、「君子は惡木の蔭に宿らず」と申すも皆同じ意義にて、おのれを敬ふ念より出でたる語に候。昔、アレクサンドル大王に對して、敵軍に夜討をかけんと申し出でたる者ありける時、大王これを却けて、「朕は勝利を盜まず」と申され候ひき。又日野阿新丸が父の仇を討ちける時、まづその枕を蹴て、目を醒まさしめて後これを擊ち候ひき。古今戰勝の將軍、復仇の子少からざる中に、是等の人のみ多く語り傳へらるるは何故なるかといふに、その所業に精神あり、香氣あるが爲に外ならず候。近來、「我は如何にして富を

資朝の子。年十三にして、父の仇本間三郎を討つ。

退いて（退きて）

竹越與三郎　三叉と號す。新潟縣の人。慶應元年十月生まる。貴族院議員

作れるか」といふが如き俗惡成功談の傳へらるるが爲、少年を誤ること少からず候。小生は、少年諸君が唯その才智藝能によりて、一時體裁よく暮すといふやうなる投機談に迷はず、精神あり香氣ある生活を營まんことを希望致し候。香氣ある人は、世間必ずこれを認むべく、一時の不遇は決して失意落膽するに及ばず候。以上は平凡の語には候へども、小生が平常家兒輩に語りをるものに候へば、無難にして間違なきことだけは確信致し候。小生は少年諸君が、退いて右の香を養はれんことをひとへに希望することに候。

（竹越與三郎――讀書樓閒話）

雲仙岳　長崎縣南高來郡。島原半島の中央にある噴火山。

窮めよう（窮めん）

遮つて（遮りて）

二一　雲仙岳

雲仙岳は溫泉岳とも書く。雲仙とは單純な一箇の山を指すのではなく、普賢、妙見、國見、絹笠、野岳等を一括した總稱で、或は東西雲仙の二連峯に大別し、時にはその最高峯なる普賢にこの代表的の名を與へることもある。

普賢は、新火山の中央火口丘であるが、私達は今、妙見と野岳とを連ぬる一線、仁田峠を過ぎて、その頂上を窮めようとするのである。野岳がこの登山道路の東を塞いでゐるので、朝日を遮つてくれるから、私達は陰の道を進むことが出來る。朝の谷間を登る爽快さには身體も引きしまる。

メートル　一メートルは我が曲尺の三尺三寸に當る。Metre

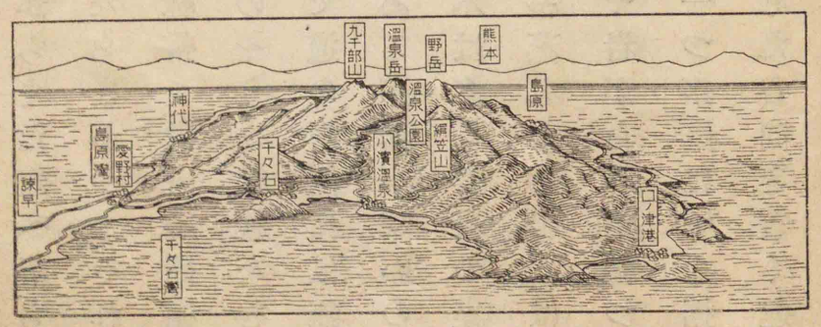
私達は汗もかかずに三十町を上つて、海拔一千八十メートルの仁田峠へ來た。空氣はそれ程ひやひやして居り、朝日はまだ山を出ない。峠へ來て初めて谷をぬけるので、忽然として海洋美の大觀に接する。「普賢へは上らなくとも仁田峠は見落すな」といはれてゐる程、その風景は美しい。私は仁田峠と、普賢の絶頂と、高岩岳の展望とを雲仙の三大景觀として推奬したい。しかし雲仙の美はこの三大景觀に止らず、展望の利く處はどこでも美しい。それは一面島原半島の海洋美によるものであつて、海洋美を兼ねることによつて、山嶽美の高調される雲仙の如き名山は、誠に類稀なるものといはねばならぬ。

有明海
島原半島と天草島との間より北方に灣入せる内海。
宇土半島
熊本縣宇土郡。
天草列島
熊本縣天草郡。天草灘中にあり。
エメラルド
Emerald
鮮綠色。
八代海
同縣八代郡。

有明海を隔てて一眸の中に入る肥筑の山野、墨繪の如く有明海に斗出してゐる宇土半島、半島の突端からつづく天草列島、盆景の小島の如く浮んでゐる島の如何に數多いことよ。列島の彼方に別にエメラルドの色をたたへてゐるのは八代海である。けれども今は目路のかぎり、紫がかつた薄絹の帷のやうに、朝霞が一面に棚引いてゐるのだ。八代海はすでに半ば以上ぼかされて、霞と海との見界はつかない。この霞の海の莊嚴さはこれを何に譬へよう。それはただ一抹にぼかされた霞の海であるだけではない。九州の連山、天草諸島、すべてが遠きも近きも、一樣にその裾を消して、頂のみをこの霞の中に現はしてゐるのだ。それがくつきりと濃い

桔梗色であり、また紺青色である。

今まで海に面してゐた眸を轉ずると、峠へ出るまでは見えなかつた普賢の峻峯が、突如として道の行手を遮つて、目の前に現はれる。また左手の眞上には妙見の内側面が、私達の踏んで來た外側面の緩傾斜に引きかへ、凡そ六十度の急傾斜をなして、切り立てたやうな巨巖の絶壁となつて、私達の頭上を壓迫してゐる。私はまた暫くこの崇高な普賢と妙見との山容に魅せられて立つた。



降つて（降りて）

横たはつて（横たはりて）

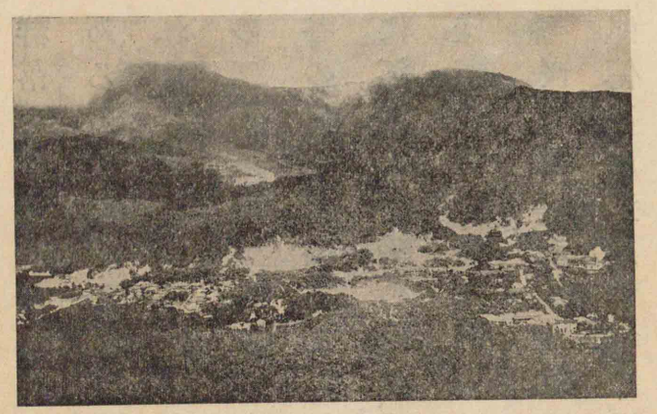
豆蔦

岩がらみ

この峠から普賢へ上るためには、ここからまた左へ落ち込んでゐる薊谷の溪谷を下らなければならなかつた。それは降つてまた昇るのであるが、暫くは密林帶で、數町の間樹木に蔽はれて、日の目も漏らぬトンネルのやうな幽邃な谷がつづく。この薊谷は舊噴火口の迹なので、道の兩側には無數の熔岩が大小錯落として横たはつてゐるが、霧が深いのと、年代を經てゐるのとで、悉く苔蒸し、樹木は多く熔岩の集團の上に根を張つてゐるのである。その苔蒸した熔岩にはまた髯のやうに絲菅が生えてをり、豆蔦や岩がらみが纏つてゐて、地肌の見える岩は無く、その一つ一つが、庭にでも据ゑようものなら大したものである。さうした谷間を暫く進

染まつて（染まりて）

んで行く中、熔岩の上に瑠璃色の可憐な花をつけてゐる小灌木を發見したが、それは思ひがけぬ深山紫陽花であつた。深山紫陽花は登るに從つて多くなり、道端から分岐してゐる小さな谷谷の中には、それが一面に咲いて、谷を瑠璃色に染めてゐる處もあつた。幽邃な霧深い谷間が、夢のやうな色に染まつてゐるのを見ると、何とも知れぬ懷かしみに打たれる。



雲仙岳

深山紫陽花はこの谷間と妙見との外では見なかつたが、

しもつけ

くましで

妙見では一方の日を受ける谷の岨に淡紅色の「しもつけ」が群落を作り、一方の蔭の谷では、紫陽花がまた群落を作つてゐるのを見て、お伽噺の谷にでも來たやうな美しさに打たれた。谷を上つて峯がまた轉ずると、今度は薊谷と共に雲仙の二大溪谷であり、また同じ舊噴火口であるところの鬼神谷の眞上に出る。ここでは國見岳が正面に見え、左に妙見、右に江丸と、外輪の山が、環狀に堵列して普賢に向つてゐる有樣がよく分る。鬼神谷は深くその間に落ち込んでゐるので、暫くこの落葉樹林に包まれた美しい溪谷を見下しながら、岨傳ひに進んで行く。道はますます嶮しくなるが、次第に絶頂に近づき、巨大な「くましで」が純林風に蟠屈してゐる中を

エキス　Extract　抽出せる精髓。

ぬけて出ると、天地は忽ち開けて、一千三百六十メートルの普賢の絶頂に立つ。

高さからいふと、山嶽としてはいふに足らぬが、さてもその展望の雄渾秀麗なることよ。雲仙がその景觀において、山嶽中の首位に推されることの當然さを、一たび普賢の絶頂に立つたものは、誰でも首肯するであらう。仁田峠の展望をすばらしいといつた私は、普賢の展望を何と形容していいか、辭なきに苦しむ。この眺望に接した私の歡喜を、この法悅境をどういひ表はしたらいいであらう。仁田の展望は、よしそれが風景のエキスであつても、普賢の展望の三分一に過ぎない。更にこれに三分二を加へたものが普賢の展望で、隨

つて美の包容量も三倍される。しかも同一展望でも、仁田峠より更に約一千尺を上つたこの絶頂では、爽快の感情が加はることはいふまでもない。

ここでは、東西雲仙の連峯は悉く脚下に朝宗する。これ等の連峯はまた、幾十の枝峯、皺襞を作り、普賢そのものも六峯に分岐し、深い襞を作つてゐるので、これ等を脚下に見おろす心地よさは、全く羽化登仙の快味である。それ等の山山谷谷は、悉く紅葉植物に蔽はれてゐるので、同一色のくすんだ針葉樹林などと違ひ、現在においても、葉色にさまざまの色合ひと調子が出てをり、眼に甚だ心地よい刺戟を與へる。もしそれ、紅葉時の全溪燃ゆるやうな美しさを、紺青の海を周圍に控へた普賢の頂上から見下した壯觀は、想像しただけでも心がをどる。實際雲仙の紅葉は他に比肩するものなく、日本一の折紙がつけられてゐるのである。

（菊池幽芳――東京日日新聞社編日本八景）

菊池幽芳
小説家。名は清。水戸の人。大阪毎日新聞社員。明治三年十一月生まる。

通草の實が赤いといふ句を作つて誰かに笑はれたことがあるが、それでもまだ何やら色づいてをるやうに思うて落ち著かなかつた。今年の夏、十和田で通草の花を教へられて、小さくはあるが、紫色がいかにも濃いのを美しいと見て、通草の實もこのやうに紫であらうときめてゐた。外皮は想像通り紫ではあるが、どこやら濁つてゐて、打身の迹らしいいやな處がある。中からは僧正の衣のやうな艶艶する紫が現はれると豫期して、二つに殼を割つて見ると、禰宜の袖のやうな純白な實が出たので、拍子抜けをする。實は軟かくて甘い。ただ黑い小さな種が無暗とあるだけが、バナナと趣の違ふ所である。（河東碧梧桐）

坪内逍遙
名は雄藏。文學博士。早稻田大學名譽教授。明治大正文學の大功勞者。愛知縣の人。安政六年六月生まる。

蘇武
字は子卿。その匈奴に使せしは、漢の武帝の天漢元年にして、赦されて歸りしは、昭帝の始元六年にて、十九年間匈奴に在りき。

匈奴
フンヌ族。蒙古地方に住せし遊牧の民にして、漢の時代に勢盛なりき。

二二　蘇武

（坪内逍遙）

風颯颯の秋ふけて、
日をかさねたる旅衣。
おもき君命いただきて、
遠く匈奴の國に入る。
野邊の草木や鳥のこゑ、
聞く物の音も見る色も、
いづれか夷のものならぬ。
思へば遠く來つるかな。
流れゆく水音たてて、
胸にうれへの波高し。
故郷母あり雁鳴きて、
老の寢覺やいかならん。
よしや幾夜の草枕、
旅寢の空にむすぶとも、
國家のために盡すべし。
君命おもく身は輕し。
かうと覺悟は定まりぬ。
使命つぶさにとり傳へ、
匈奴の王に面接し、
國書をここに呈しけり。

もとより非道の王なれば、
國書の旨意は聽かざれど、
單身敵地につかひせし、
蘇武が勇氣をしみつつ、
ある時蘇武を召しよせて、
「降り仕へよ、しかあらば、
おもく汝を用ゐん」と、
說き諭せども聽かざれば、
國王おほいに怒をなし、
蘇武をとらへて荒山の、
いはやの中に幽閉し、

つんざき（つきさき）

食を與へず苦しめぬ。
頃しも北風雪を吹き、
寒さ膚をつんざきぬ。
飢うれば枯草を雪に和し、
いのちを繋ぐ料となす。
日數經れども死せざれば、
えびすら怪しみ且恐れ、
こたびは蘇武を野に移し、
羊の群をまもらせて、
「雄羊孕むことあらば、
放免せん」とあざけりぬ。

覺悟はしても無念さに、
眠られぬ夜も幾度か。
一夜雲なく月すみて、
秋も最中の空のいろ。
せめてはかくて在ることを、
雁に託せし筆のあと。
かくて春去り夏來たり、
また秋の風冬の霜、
落葉落葉のかさなりて、
十有九年ゆめの間や。
老いて屈せぬ忠節を、

天助けてか不思議にも、
雁の使のかひありて、
樂しきたよりぞ聞えける。
國と國との和議なりて、
蘇武は赦され歸れるが、
立ち出でし時の黑髮は、
いつしか雪とぞなれりける。

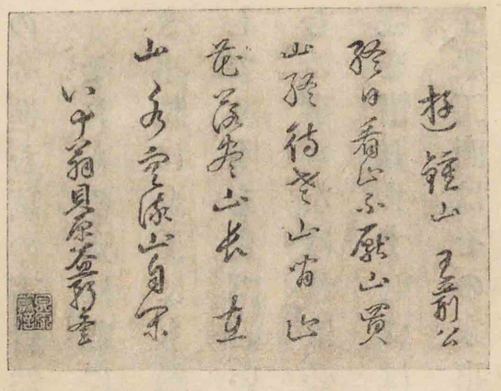
觀世左近は謠に名を得たる者なり。謠に三病あり、聲のよきと、覺の强きと、拍子のききたるとこの事備はれるもの、多分謠にならずして止むと、人に敎へつ。これ何の道にもあるべき事なり。器用を賴む者はみづから滿てりとす。みづから滿てりとする者は工夫を積まず、工夫を積まざる者は諸藝の奥意をさとり難し。（武將感狀記）

二三　人の寶

およそ幼より勉め學ぶに暇を惜しむべし。古の禹王は聖人なりしだに、猶寸陰を惜しみ給ふ。況や今の凡人をや。いたづらに悠悠として空しく時日を費すべからず。光陰は箭の如く、時節は流るるが如くなれば、年少きをたのんで時を失ふべからず。人の世にあるや、老幼の時と病の時とは學び難し。又、四民ともに、その家のことわざ繁くして物學ぶひまは少し。その少き暇を惜しまず、怠りて空しく過し、或は無益の事をなして

貝原益軒

時を費し、一生をはかなく終らん事、いと愚なりと謂ふべし。今年の今日、二たび得難き事を思ひて、假にも徒に時をわたるべからず。これ一生の間心を用ゐるべきことなり。古人も「常にしておかず、常に行ひてやまざる者には及び難し」といへり。徒になすことなく、常に暇多き人は、人に過ぐることはなきものなり。たとへば、農夫、商人の力めて暇を惜しみ、朝夕田を作り或はあきなふ者は、必ず人にすぐれて、その家富みて衣食ともしからず。古人も「人生は勉むるにあり。勉むれば則ちまどし



貝原益軒筆

遊鍾山　王荆公

終日看山不厭山、買山終待老山間、山花落盡山長在、山水空流山自閑。

八十翁貝原益軒書

からず」といへり。國家の政をくはしく勉むれば、その國家必ず治まる。學問をくはしく勉むれば、必ず諸人にすぐれてその才進む。萬の事皆然り。

それ人の寶は暇に過ぎたるはなし。されば、その惜しむべき事、誠に金玉にも過ぎたり。古語にも、「聖人は尺璧を貴ばずして寸陰を貴ぶ」といへり。暇を惜しまざる人は、學ぶ事も勉むる事もなければ、必ず才智も德行も藝能もなきものなり。暇を惜しまずしては君子は身を修め家を齊ふること能はず。農工商はその家事を失ひて貧窮飢寒を免れず。學者は必ず粗學にして不才なり。醫師は必ず賤工なり。萬の道道の匠も必ず拙し。これ暇は人生の寶にして惜しむべき故なり。就

「聖人は云云」　淮南子に曰はく、「聖人は尺璧を貴ばずして、尺寸の陰を貴ぶ。」

中、年少の時は事少く暇おほく、精力つよく、記憶つよく、一度見聞きて覺えたること身を終ふるまで忘れず。この時勉め學べば、その功多し。故に書を讀むことは、少年の氣力つよく暇ある時、よく勉むべきなり。三十歲以後は、よろづ務多くなりて暇少く、精力やうやう弱くなるままに、その記憶衰へぬれば、力を多く用ゐても忘れ易く、勞すれども功少し。年少なる人はこれをよく心得て、若き時暇を惜しみ、學問を勉むべし。淵明が詩に曰はく、「盛年不重來、一日難再晨、及時當勉勵、歲月不待人。」又古詩に、「少壯不努力、老大徒傷悲」といへり。若き時、これをよく考へ、後悔なからんことを思ふべし。又暇を惜しみて又よく勉むとも、學問の術をえらばざれば益なきこと

淵明　晉の高士。姓は陶、名は潛、五柳先生と號す。（西暦三六五年―四三七年）

に迷ひ、心を用ゐ苦しめて、一生を終へん。これ亦愚なりといふべし。（貝原益軒――大和俗訓）

貝原益軒　筑前の碩儒。名は篤信、正德四年歿す。（一二九〇年―一三七四年）

學は勇進を喜ぶと雖も、又急迫なるを嫌ふ。ただ怠惰を戒めて常にひたりなば、久しうしておのづから進益あるべし。翁昔加賀に在りし時、士族の中に紹鷗利休が風流を慕ひて、茶の湯を好む者ありけり。江戸へ行役の時道中茶の具を持ちて、逆旅にても釜を懸け炭を置きて樂しみとしけるを、同行の人見て、「いかに好けばとて道中にては止めよかし」といへば、その人道中の日とて一生の外にあらばこそ、これも一生の日の數の内なれば、わが茶の湯をする日にあらずといふことなし。家に在ると何ぞ異ならん」とて、その後も止めざりき。學者の道に志すもこの人の茶の湯好むが如くあれかし。然れども急迫にして求めなば、假令僅々の得ありとも皮膚の間にして止みなむ。いかでその肉むらを嚙んでその滋味に飽くことを得べき。（室鳩巣）

二四　水國の秋

眼さめて戸を開けば、息栖宮の大鳥居は水中に聳え立ち、一里向なる小見川の里はなほ蒼き朝霧に睡れり。耳をすませば、向岸の鷄聲ほのかに聞ゆ。廣廣としたる利根の川づら、眼を遮るものもなし。程なく日出でて、岸の藁屑に置ける朝霜きらきらと光り、水蒸氣立つ水の面、ところどころ磨ぎ澄ましたる鏡のやうに閃くころ、起き出づる村人三三五五來たりて江水に嗽ぎ、今柵を放たれたる家鴨は刮刮と騒ぎつつ水に跳び込む。中流にはすでに白帆の影あり。岸には村人の語る聲凜として朝の空氣に響き、稻を載せ、馬を載せて出

息栖宮　茨城縣鹿島郡中島村にあり。住吉三神を祀る。

づる舟あり、網を載せて出づる舟あり。

朝餐の膳に向へば、汁も膾も皆鯉なり。昨夜鯉網をあげて二百貫目の漁獲ありきといふ。息栖の宮に詣で、午前十一時潮來に渡るべき小舟を僦ふ。息栖より潮來まで三里、舟賃は三十錢なり。

潮來　茨城縣行方郡潮來町。

小春の日和うららかに晴れて、暖日、櫓聲睡を思はしむ。舟は蘆の茂れる中洲に沿ひ、また左の岸に沿ひつつ、深きに櫓を立て、淺きに棹さして行く。水村の趣何處も同じことながら、このあたりは景色殊に勝れ、川水鏡の如く光りたるに、空行く白雲、汀の枯蘆、蘆間がくれの茅舍、屋後の林、繫げる小舟、水を汲み菜を洗ふ村の女まで、殘無く影を映し、舟脚の行く

ままに、水ゆらゆらと搖ぎて、蘆影、柵影、人影、舟影、一時に伸びつ縮みつす。遠くより望みし一叢林、來て見れば何の神を祭れるにや、汀に古き鳥居の立ちてあり。水鳥の立つ下より、一艘の鰕捕る小舟のさわさわと枯蘆を分けて出づるもあり。或は圓筒形の竹籠樣のものを、三尺ばかり隔てて幾箇となく水に浸し、そを繩もて列ね、竿を立てたるを、小舟を足もて動かしつつ、一つ一つ揚げ見る者もあり。これは鰕或は鰻を捕るなり。

竹籠樣のもの　笱をいふ。次の繪の如し。

わが船頭は他の舟に逢ふ毎に聲かけて行く。うららかなる日の水上は、殊更人語の清く聞ゆるものなり。三町あまり離れたる渡船の中に、村の男女の笑ひさざめく聲手に取る

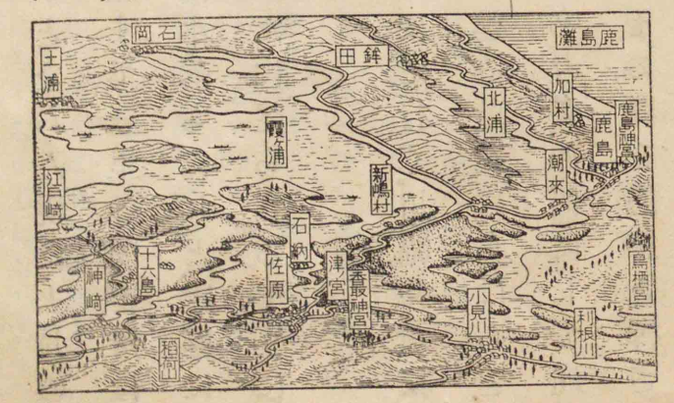
加村　茨城縣鹿島郡。
佐原　千葉縣香取郡。
北浦　茨城縣鹿島行方兩郡の間にあり。
鹿島　茨城縣鹿島郡。

やうに聞ゆ。加村に到れば、中洲盡きて河幅俄に廣うなり、水は三叉になりぬ。西は佐原より東京にかよふ利根の本流にて、北は所謂北浦なり。水青青として見る眼遙なるに、白帆三つ四つ。鹿島は何處ならんと打ち眺めて行く。このあたり水甚だ淺く、水を出づる蒲の根あれば、水に浮ぶ藻もありて、舟は時時流砂の暗洲をなせるに腹を摩して行く。魚鰕を集むる爲に、處處水中に竹の柵を設けたるが、或は傾き或は斷え、見え隱れするも長閑けき限なるに、漁舟三つ四つその蔭に往來出沒して、何處ともなく欸乃聞え、魚を驚かすとて棹もて舷をほとほとと敲く音も聞ゆ。舟は北浦の口を横ぎりて進む。鹿島の方より材木を積みて來たる舟の洲に乗りあげ

十六島　千葉縣香取郡と茨城縣稻敷郡とに跨る低洲。

て、舟人汗になりて棹さすも見ゆ。

十六島の南端、大崎の鼻には漁家二三。網は門にあり。魚籃は水にあり。竿に蓑を乾し、杭に舟を繫ぎたり。裏には物見櫓のやうなるものあり。鮭の見張をするなりといふ。畫にしたき景なり。十六島を左に見て、所謂北利根の支流を溯る。この十六島は新島村と稱し、三千餘町歩の田あり、九萬石の收穫ある大村なり。頭は霞が浦にあり、尾は北浦にあり。利根の本流は左、北利根は右、横利根は頭の方を斜に限



石納　茨城縣稻敷郡。
津の宮　千葉縣香取郡。

りたるものにて、若しこの島なくば、石納、佐原のあたりより加村、津の宮あたりまでは、一面の湖水とならん。現に去月の大水にて、全島水に沒し、潮來より佐原まで三里の間を、舟は直に島の上を往來したりといふ。今は水落ちたれど、處處に溜りあり。岸に乾したる稻も、雀の餌にだに足らざるやうに見ゆ。

北利根に入りてより、櫓を措きて棹にて行く。川幅甚だ狹ければ、舟はさわさわと蘆押し敷きて進み、蘆花はらはらと面に降りかかる。處處に鯉網、鰕柵の設ありて、如何にして通るならんと思へども、舟人はたくみにその間を悠悠と棹さし行く。

徳富蘆花　文學者。名は健次郎。熊本縣の人。「不如歸」「自然と人生」その他著述多し。昭和二年十月歿す。（一八六二年—一九二八年）

午後二時潮來に著き、角菱といふ宿に投ず。上に松杉の茂りたる稻荷山あり。前に北利根の流あり。粉壁瓦鱗參差として千百戸、流石に古き所にて趣あり。（徳富蘆花——青山白雲木）

の丸神社は齊明天皇を祭つたものだといはれてゐる。その祭禮の儀式は珍しいものであつた。子供の時分に一二度見ただけだから大部分は忘れたが、儀式は刈株の殘つた冬田の上で行はれた。其處に神輿が渡御になる。それに從ふ村中の家家の代表者は、皆袴を著て、傘程に大きな菅笠のやうなものを冠つて居た。そして左の手に小さな鉦をさげて、右の手に持つた木槌でそれを叩く。單調な聲で、緩かな拍子で、「ナーンモーンデー」と唱へると、鉦の音がこれを受けて「カーンコカンコ」と響くのである。どういふ意味だか分らない。或人は「南門殿還幸」を意味するといつてゐたが、それは餘り當にはならない。私はむしろ意味をなさない方がいいやうな氣がしてゐた。（吉村冬彦）

白河樂翁公
松平越中守定信。磐城國白河の城主。後、老中となる。文政十二年五月歿す。(二四一八年—二四八九年)

田安邸
江戸城田安門内にあり。定信は田安宗武の次子。

二五 歌話

一、とりゐ阪

白河樂翁公、年十二にてなほ田安の邸におはせし頃、麻布鳥居阪なる戸川内膳の邸宅より火起り、その邊の町家類燒しけり。大火といふまでにもあらざりしかど、燒死せしもの多かりしかば、

この火事は人の命をとりゐ阪

これより上のとがはないぜん。

と落首せるものありけり。近侍の人人興じ笑ひて、「いかにもよく詠みたり」と評し合ひけるを、君聞き給ひて、「余が詠まん

奥醫師
德川幕府の醫官。將軍の診候醫藥の事を掌る。

梅檀の二葉
諺に「梅檀は二葉より香し。」

中村秋香
靜岡縣の人。御歌所寄人。明治四十三年歿す。(二五〇一—二五七〇)

延享
櫻町天皇の御代。

にはさはいはじ」とありければ、奥醫師の某、「さらば何とか詠ませ給ふ」と問ひまゐらするに、「いはじ。いはじ」とすまひ給ふを、強ひて問ひまゐらせたりしかば、「四の句を『怪我のことなり』といふべきなり」となり。

一句のことにて一首の意味を全く顚倒せしめ、過ちのやみ難きに出づるを明かにせられしこと、誠に梅檀の二葉」とぞいふべき。(中村秋香—新說歌がたり)

二、あがたの宿

延享某の年の秋、江戸大風雨にて、市中ところどころの人家破損しけるあけの日、賀茂眞淵翁の許へ門人某見まひに行きけるに、翁の家も夜來の風にて、屋根大方吹きまくられ、

日光席にさし入り、屋根板狼藉たる中に、翁は平常に異なるさまもなく、机によりて沈思吟詠せり。「烈しき風雨にも候ひしかな」といふ聲を聞き、始めて某の來たれるを知りけん、顧みて會釋しつつ、餘談に及ばず、「この嵐にて一首出で來ぬ」とて、書きて示しける歌、

野分してあがたの宿はあれにけり
月見に來よとたれにいはまし。

（中村秋香―新説歌がたり）

天明　光格天皇の御代。火災は天明八年のこと。

三、沖つ白波

天明大火の後、小澤蘆庵は京外の太秦に假住居してありけるが、或夜ぬす人ども來たりて、翁の家の遺戸をこじ開けて入らんと窺ひたるを、翁早くも氣づきて、身には腹卷を著、右の手に長刀を拔きもち、左の手に手燭執りて、ぬす人ども入らば斬らんの勢を示しつれば、ぬす人ども入りかねて歸りぬ。その明日の夜も來たりぬれど、又おなじ態にてあるに、流石のぬす人もあきらめてか、遂に來ずなりぬるまま、

ありそみの巖こごしみ越えかねて
よるよるかへる沖つしらなみ。

（菅茶山―筆のすさび）

小澤蘆庵　京都の歌人。名は玄中。別に觀荷堂と號す。享和元年七月歿す。（一三八三年―一四六一年）

太秦　京都府葛野郡。

菅茶山　儒者。名は晉帥、字は禮卿。通稱太中。備後神邊の人。文政十年八月歿す。（一四〇八年―一四八七年）

「親のない子はどこでも知れる。爪をくはへて門に立つ」と子供等に唄はるるも心細く、大方の人交りもせずして、裏の畑の木萱など積みたる片蔭にせせぐまりて、永の日を暮しぬ。わが身ながら哀なりけり。

われと來て遊べや親のない雀。（小林一茶）

磐梯山　福島縣耶麻郡にあり。
猪苗代湖　磐梯山の南麓にあり。耶麻、安積、北會津の三郡に跨る。
過つて（過ちて）

二六　野口英世

磐梯の山紫に秀麗の姿を横たへ、猪苗代の湖白く的皪たる鏡を展ぶる處、一小驛ありて翁島と呼ぶ。この一寒村こそ尊き科學の殉教者にして、日本が世界に誇り得る偉大なる學者、野口英世を生みたる名譽の鄕土なれ。

英世幼名は清作、その家極めて貧しかりき。三歳の春、過つて爐中に落ち、火傷の爲左手の指は皆癒著して思はざる不具となれり。長じて小學校に入るや、動もすれば群童にその不具を嘲笑せらるるを慨し、自ら努めて運命を開拓し、彼等に一矢を酬いんと志しぬ。夜、書を讀まんとするに燈火なけ

辛うじて（辛くして）
渡邊ドクトル　名は鼎。現に若松市に住む。

れば、或は小學校の小使部屋に往き、或は爐中の榾火の光を便り、或は鄰家なる旅籠屋の手傳をなしつつ、風呂焚く火も て讀書せしことも一再ならず。又早朝に附近の小川や湖水等にて捕れる鰌、小魚の類を鬻ぎて家計を助け、辛うじて筆墨をも購ひ得たりき。

野口英世

その後諸家の好意によりて、若松なる渡邊ドクトルの手術を受け、癒著せる英世の五指は箇箇に分離せられ、ほぼ常態に復るを得たり。深くも醫術の恩惠に浴せし彼は、自らも亦醫家となりて濟生救民に力を致すべく決心し、遂に渡邊氏に請うてその書生となれり。時に年十八。

新なる學問の天地に身を置きてより、英世の精進は更に加はりぬ。まづ英佛獨の語學を修めしが、辭書を用ゐるに斷じて一語を再び引かしとの誓を以てせり。されば僅に一年にして醫學の原書を讀解し、漸次その飜譯をさへ試みるに至り、殊に獨逸語は學ぶこと三箇月にして、「我既に獨逸語を卒業せり」と壯語するの域に達せりといふ。されど鬱勃たる意氣いかでか邊陬に晏如たるに堪ふべき。業成らずんば死すとも還らじの決心を抱いて鄕關を辭し、東京に向ひぬ。刻苦の效は空しからねども、學資の窮乏は如何ともし難く、嘗て一面識ありし血脇守之助氏を訪ひ、人力車夫となりて勉學せんと相談せり。血脇氏は當時未だ志を得ざりしが、苦境

抱いて（抱きて）

血脇守之助　東京齒科醫學專門學校長。

の中に自ら薄給を割きて、骨肉も啻ならざる援助と激勵とを與へたり。英世はその恩に感じ、心服して弟子の禮を執り、一層の努力を惜しまざりしかば、翌年終にわづか二十二の青年にして醫師の免狀を獲たりき。

天才の芽はかくて徐徐に伸び來たれり。雄心落落たる英世の夢は、嘗て傳染病研究所在勤中に相識りし米國の大醫フレキスナー教授の許に飛べり。しかも渡航資金なきを奈何せん。これを憐みしはまた血脇氏なりき。英世の光輝ある成功史の一部には、實に血脇氏の明察と任俠とを特筆せざるべからざるなり。

明治三十三年十二月、英世は多年の宿望を達して、その夢

ペンシルバニヤ Pennsylvania

寐にも忘れ得ざりし米大陸の土を踏めり。然るにその唯一の憑みとしたるフレキスナー教授はペンシルバニヤ大學に轉任早早の事とて、快く彼を迎へたれども、未だ異邦人をその助手として任用する自由を有せざりしかば、英世は一縷の望を失ひ、暫く茫然自失せざるを得ざりき。されど砥礪の上に碾轉せらるるは珠玉が當然經過すべき道程ならずやと、英世は翻然として悟り、捨身の苦行に驀進せり。彼はペンシルバニヤ大學の圖書館に籠ること五十餘日、英獨佛の文獻を渉獵して一心不亂に、睡を催せばそのまま机に凭りて眠り、水と麵麭とを以て纔に飢渴を凌ぎつつ、遂に全紙二百五十頁の蛇毒研究に關する一巻を完成し、これを教授に

カーネギー Carnegie

示せり。教授も深く英世の非凡なる精力と熱意とに動かされ、遂に箇人としてその助手に用ゐるに決せり。死中に活を求む」とは、誠に英世が執りし手段の謂なりけり。

かくて辛くも飢を免れ得たる英世は、薄給窮乏の裏に、鋭意專念研鑽に沒頭せり。而して渡米後未だ期年ならざる翌年の秋、全米萬有科學會に於いて、フ教授等に推されて蛇毒研究の講演を試み、矮小白面の異邦の一書生は、忽ち米國學界の權威等の中に、嶄然として頭角を見はし來たれり。

爾來三年の英世が刻苦は、次次に前人未知の學説となりて學界に貢獻し、カーネギー學院よりは屢奬學金を受け、ペンシルバニヤ大學は彼を擧げて病理學上席助手に任じ、次

いで歐洲留學を命ぜり。英世の欣快思ふべし、しかも彼は「今は歐洲には永く滯在の要なし」と自信の一言を吐き、各國留學生が殺到し、嘗ては自らも憧憬の的とせし獨逸を避けて、閑靜なる丁抹を選び、その首都なる國立血清研究所に入りて研究を重ね、此處にても淹留一年の間に價値ある三篇の著作を完成せり。歸途、英獨佛諸國を視察し、千九百四年秋歸米せしが、折から紐育にロックフェラー研究所新設せられ、フ教授はその所長となれり。英世も恩師に從つて研究所最高幹部の列に加はり、細菌部長の重任を擔ふに至りしのみならず、この間、故國には未だ嘗て類例無き大部の論文を提出して、文部省より醫學博士及び理學博士の學位を授けら

その首都　コペンハーゲン。

紐育　北米合衆國紐育州の都府。New York

ロックフェラー　Rockefeller

れ、又學士院會員に勅選せられぬ。

英世の業績中殊に貴重なるは、古來明かならざりし黃熱病の病原體發見とその療法確立とにして、こは實に萬古不朽の偉勳といふべく、これに依りて救はれたる南米エクワドル國は英世の功に酬ゆるに名譽陸軍大佐の待遇を以てし、記念塔を建てて永くその功を勒し、又首府の一角には野口町の名をさへ附せり。然るに西ア

エクワドル　Ecuador　南米北西部の共和國。

學士院賞記と賞牌

賞記

帝國學士院ハ醫學博士理學博士野口英世ノ「スピロヘータパリーダ」ニ關スル研究ニ對シ本院授賞規則第二條ニ依リ茲ニ恩賜賞賞牌及賞金ヲ授與ス

大正四年七月吉日

帝國學士院長正三位勲一等理學博士菊池大麓

フリカ沿岸にては尚この病猖獗を極めたるを以て、英世は自らこれを解決せんと欲し、昭和二年十一月、單身西アフリカなるアックラの地に航し、殆ど寢食を忘れてその研究に努力せしが、遂に恐るべきこの病に感染し、偉業半ばにして、翌年五月二十一日再び起たずなりぬ。嗚呼科學の殉教者、人道の戰士は、此の如くにして、惜しみてもなほ餘ある五十三年の生涯を棄てたるなり。

アックラ　黃金海岸に在る都市。Accra

邊陬の農家に生まれたる一貧兒英世が、遂に一世の碩學として世界の大舞臺に立ち、人類の幸福に幾多の寄與をなしつつ莊嚴なる死を遂げ、その死は殆ど世界のあらゆる國語もて痛惜せられしは誠に偉なりといふべし。しかも英世に於いて更に偉とする所は、その高潔圓成の德にあり。彼が學術の研鑽と同時に深く人格の完成を念とせしことは、恩師血脇氏等に送りし書信中に屢看取せらるる所なり。いはく「人間は技倆のみにては世に立てず、立ちても機械同樣なり。是非とも相應の德行なかるべからず、技倆は第二なることを始めて感じ候。爾來小生は是非とも人らしき人となりたしとのみ思ひ、修養致し居り候」いはく「小生はよしやこれ以上如何なる逆境に陷るとも、心の平和は決して擾亂せらるることなし。勉め得る限は勉めて、達し難きものは小生の力以外と存じ、失望することは必ずこれなく候。只管一瞬間を油斷なく誠實にやることのみが祕訣と存じ候」等の字句

にて、その面目ほぼ想像せらるるのみならず、血脇氏の恩を銘記すること最も深く、十五年間に長文の書を寄することの實に二百餘通に達せりといふ一事を以て見ても、その性格の敦厚なりしことを知るべし。

英世また天性至孝、「小生の過去に於いて、最も懸念と奮起との種は母上なりき。又將來に於ける小生の光明と勇氣との源も一に母上の愛にこれあり候。今回も一度歸朝したけれど旅程甚だ遠く、目下の境遇これを許さず候。然し數年内にはどうか都合して歸省致すべく候」と。これ大正四年學士院賞受領當時、血脇氏に致しし書簡の一節なるが、その後三箇月を出でざるに、親友より送られたる慈母の寫眞の老衰

せる面影に、そぞろ思慕の念已む能はず、急遽旅裝を整へて歸國せり。別後十六年にして母子再び相會ひし翁島驛頭の劇的光景は、眞に幾百の群衆の暗涙を誘ふものなりき。

嗚呼英世の業績は此の如き崇高の人格を背景として愈光輝を發するが如き感あり。否、此の如き人格ありて、始めて仁術の眞精神を發揮せる偉業は成れるなるべし。殊に諸人好意の諫止を斥け、萬里絶海の蠻地に航し、烈しき瘴癘と戰ひてこれを征服せんとせし努力の如きに至りては、豈ただ名と利とをのみを趁ふ尋常學者のかけても企て及ぶ所ならんや。

陽太の漠沙

二七　太陽禮讃

私の居室は二階で、六疊と十疊との二室を書齋、寢室として居る。主に私は十疊に眠る、鄰の六疊は東にある。六疊の外は廣い廊下で、廊下の東壁に大きな窓がある。窓の横に扉がある。扉を開けて物干に出る。物干から一望の下に東方の攝津平野と、野路と、高低に起伏する人家の屋根とが見える。遠い林の彼方此方に、赤い屋根や青い窓の住宅が、玩具のやうに散在する。朝の四時になると、窓窓が白む。私はいつも讀書したり、原稿を書いたりして夜を更かす。二時になると、もう寢るのが惜しい。朝日を拜んでから寢ようと思ふ。五時に電

拜。んで（拜みて）

燈が消える。そこで雨戸を開ける。疲れた私の頭はぼんやりとして居る。そのまま私は物干に登る。東方一抹の淡靄の上に大きな朝日が猩紅色を帶びて躍り出して居る。それは母胎から躍り出た金太郎のやうに活き活きとして居る。赤色と光明と力とは、私の頭の中に黃金の杭を打つ。非常に緊張した、花嫁のやうな謙遜な氣持と、子供のやうな單純さと、帝王のやうな莊嚴さとを以て、朝日は素裸のまま私の面前に立つ。

佐藤紅綠

單純と謙遜と莊嚴とは、素裸でなければ得られぬものだ。あれだけ大きな力を持ちながら、しかも毎日毎日東の方に

含羞んで（含羞みて）

露うた（露ひたる）

出現しながら、出る度毎に何かしら含羞んで居るやうにも見えるのは、どういふわけであらう。最も偉大なものは最も謙遜である。朝日が私の胸を直射する時、私の心は一時に覺醒する。いろいろな俗念や、憤や恨や愚痴や疲勞や倦怠は、旱時の草が雨に露うたよりも速に平癒する。心の病に利く靈藥は朝日である。

家家の屋根は、窓は、物干は、そして野の路は、電信柱は、積藁は、踏切小屋は、煙を立てて居る煙突どもは、森の小鳥は、畑の野菜は、すべてその光を受けてほつと眼を覺まし、休息から活動への感謝を捧げる。

三十分も經つと、私の窓から眞直に朝日が入來する。美し

滑つて（滑りて）

杉浦重剛 舊膳所藩士。天台道士又梅窓と號す。東宮御學問所御用掛。大正十三年二月歿す。（年二五一五—二五八四年）

ピラミッド 古代埃及國王の墳。カイロ附近にあり。Pyramid

スフィンクス ピラミッド附近にある獅身人面の石像。Sphinx

い光は六疊の疊を滑つて、一直線に十疊の正面の掛軸の半分以下の處まで射し込む。私の床には杉浦重剛先生が私に書いて下された、三復堪ヘタリ誦スルニ古人句、雙懸日月照ラス乾坤ニの一對が掛けてある。

私は埃及に遊んだ時、ピラミッドとスフィンクスとの間の丁度眞中の處に、沈沈として落ち行く眞赤な夕陽を見た。この時の悲愴さは何ともいふ言葉がなかつた。スフィンクスは東を向いて蹲つて居る、東方の美、東方の神祕！永遠の謎を解くべく、彼は東方を眺めて居ること何千年か解らない。世界の文明の始祖たる埃及の砂漠に立つてゐるこの石の獅子は、確に朝日の出る日本を見てゐるに違ない。一番初

に夜の明ける日本の緑の島の岬の岩頭に立ちたいと願つてゐるに違ない。

「目覺めよ、東方の人人。お前達は西方の國よりもより早き文明と、洗錬された文明と、いと高き文明とを有つて居る。お前達は夕日の沈む西の國國を見倣ふ必要はない。お前達は東の人ぢやないか。黎明の人ぢやないか。朝日の國民ぢやないか」と石の獅子は叫んで居る。（佐藤紅緑――雑誌キング）

刀一本打つにも、全力を注いで幾度も幾度も鍛錬するのぢや。まして人間一人を作り上げるのは容易な業ぢやない。胡瓜の花は澤山咲いても無駄花が多いしね。柿など赤く熟して、さも甘さうになつても蔕の所に蟲がついて居たり何ぞするぢやないか。（天台道士語錄）

佐藤紅緑　小説家。名は洽六。弘前の人。明治七年七月生まる。

石浦　京都府加佐郡由良町字石浦。山椒大夫の屋敷迹といふがあり。

由良の湊　舞鶴と宮津との中間にある小港。

大雲川　由良川ともいふ。福知山より來たりて由良の港に注ぐ。

中山　大雲川の右岸。由良の南一里。

二八　厨子王

安壽は山の頂に立つて、南の方をぢつと見てゐる。目は石浦を經て由良の港に注ぐ大雲川の上流を辿つて、一里ばかり隔つた川向に、こんもりと茂つた木立の中から、塔の尖の見える中山にとまつた。そして「厨子王や」と弟を呼びかけた。

森鷗外

「もうけふは柴なんぞは刈らなくても好いから、わたしのいふ事を好くお聞き。あの中山を越して往けば、都がもう近いのだよ。筑紫へ往くのはむづかしいし、引き返して佐

恐しい人（恐しき人）

傳つて（傳ひて）

渡へ渡るのも、たやすい事ではないけれど、きつと往かれます。おかあ様と御一緒に岩代を出てから、わたしどもは恐しい人にばかり出逢つたが、人の運が開けるものなら、善い人に出逢はぬにも限りません。お前はこれから思ひ切つて、この土地を逃げ延びて、どうぞ都へのぼつておくれ。神佛のお導きで、善い人にさへ出逢つたら、筑紫へお下りになつたおとう様のお身の上も知れようし、佐渡へおかあ様のお迎に往くことも出來よう。籠や鎌は棄てて置いて、樏子だけ持つて往くのだよ。

厨子王は默つて聞いてゐたが、涙が頰を傳つて流れて來た。

「そして、ねえさん、あなたはどうしようといふのです」。

「わたしの事は構はないで、お前一人でする事を、わたしと一緒にする積りでしておくれ。おとう様にもお目に掛かり、おかあ様をも島からお連れ申した上で、わたしを助けに來ておくれ。

「でも、わたしがゐなくなつたら、あなたをひどい目に逢はせませう。

厨子王が心には烙印をされた恐しい夢が浮ぶ。

「それはいぢめるかも知れないがね、わたしは我慢して見せます。金で買つた婢をあの人達は殺しはしません。多分お前がゐなくなつたら、わたしを二人前働かせようとするでせう。わたしは柴を澤山刈ります。六荷までは刈れな

附いて（附きて）

いでも、四荷でも五荷でも刈りませう。さあ、お前を麓へ送つて上げよう。

かういつて安壽は先に立つておりて行く。厨子王はなんとも思ひ定めかねて、ぼんやりして附いておりる。姉は今年十五になり、弟は十三になつてゐるが、女は早くおとなびて、その上ものに憑かれたやうに、聰く賢しくなつてゐるので、厨子王は姉の詞に背くことが出來ぬのである。

途中の木立の處までおりて、二人は籠と鎌とを落葉の上に置いた。姉は守本尊を取り出して、それを弟の手に渡した。

「これは大事なお守だが、今度逢ふまでお前に預けます。この地藏樣をわたしだと思つて、護刀と一緒にして、大事に

さつき（さき）

和江 大雲川の左岸、中山の向ひ、由良の南一里。

持つてゐておくれ。

「でも、ねえさんにお守がなくては。

「いいえ。わたしよりはあぶない目に逢ふお前にお守を預けます。晩にお前が歸らないと、きつと追手が掛ります。お前がいくら急いでも追ひ附かれるに極まつてゐます。さつき見た川の上手を和江といふ處まで往つて、首尾好く人に見附けられずに、向河岸へ越してしまへば、中山までもう近い。そこへ往つたら、あの塔の見えてゐたお寺に這入つて隱しておもらひ。暫くあそこに隱れてゐて、追手が歸つて來たあとで寺を逃げてお出でよ。

「でもお寺の坊さんが隱して置いてくれるでせうか。

輝いて（輝きて）

汲んだ（汲みたり）

「さあ、それが運だめしだよ。開ける運なら、坊さんがお前を隠してくれませう。

「さうですね。ねえさんの今日おつしやる事は、まるで神様か佛様がおつしやるやうです。わたしは考を極めました。なんでもねえさんのおつしやる通りにします。

厨子王の目が姉と同じやうに輝いて來た。二人は急いで山をおりた。足の運びも前とは違つて、姉の熱した心持が、暗示のやうに弟に移つて行つたかと思はれる。

泉の涌く處へ來た。姉は樒子に添へてある木の椀を出して、清水を汲んだ。「これがお前の門出を祝ふお酒だよ。」かういつて一口飲んで弟にさした。弟はこれを飲みほした。

沿うて（沿ひて）

「そんならねえさん、御機嫌好う。きつと人に見附からずに中山まで參ります。

厨子王は十歩ばかり殘つてゐた阪道を、一走りに驅けおりて、沼に沿うて街道に出た。そして大雲川の岸を上手へ向つて急ぐのである。安壽は泉の畔に立つて、竝木の松に隱れては又現はれる後影を小さくなるまで見送つた。そして日は漸く午に近づくのに、山に登らうともしない。幸に今日はこの方角の

安壽と厨子王（原田千里筆）

山で木を樵る人がないと見えて、阪道に立つて時を過す安壽を見咎めるものもなかつた。

後に同胞を捜しに出た山椒大夫一家の追手が、この阪の下の沼の端で小さい藁履を一足拾つた。それは安壽の履物であつた。

中山の國分寺の三門に、松明の火影が亂れて、大勢の人が籠み入つて來る。先に立つたのは、白柄の薙刀を手挾んだ山椒大夫の息子三郎である。

三郎は堂の前に立つて大聲にいつた。「これへ參つたのは石浦の山椒大夫が族のものぢや。大夫が使ふ奴の一人がこ

山椒大夫　由良の石浦の長者。

の山に逃げ込んだのを、たしかに認めたものがある。隱れ場は寺内より外にはない。すぐにここへ出して貰はう。附いて來た大勢が、「さあ出して貰はう、出して貰はう」と叫んだ。

本堂の前から門の外まで、廣い石疊が續いてゐる。その石の上には、今手に手に松明を持つた三郎の手のものが押し合つてゐる。又石疊の兩側には、境内に住んでゐる限の僧俗が、殆ど一人も殘らず簇つてゐる。これは追手の群が門外で騒いだ時、内陣からも、庫裏からも、何事が起つたかと怪しんで出て來たのである。初め追手が門外から門を「開けい」と叫んだ時、開けて入れたら亂暴をされはしまいかと心配して、開けまいとした僧侶が多かつた。それを住持曇猛律師が開

貰はう。（貰はん）

簇つて（簇りて）

開けい。（開けよ）

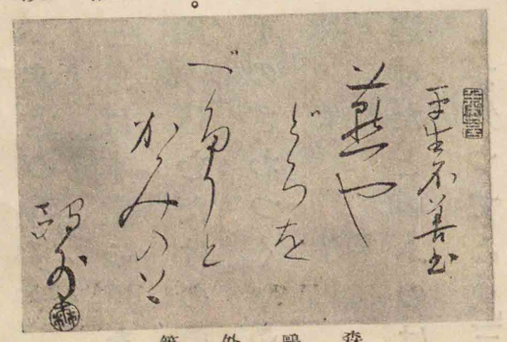
けさせた。然し今、三郎が大聲で「逃げた奴を出せ」といふのに本堂は戸を閉ぢたまま、暫くの間ひつそりしてゐる。三郎は足踏をして、同じ事を二三度繰り返した。手のものの中から「和尚さん、どうしたのだ」と呼ぶものがある。

やうやうの事で本堂の戸が靜かに開いた。曇猛律師が自分で開けたのである。律師は偏衫一つ身に纏つて、なんの威儀をも繕はず、常燈明の薄明りを背にして本堂の階の上に立つた。丈の高い巖疊な體と眉のまだ黑い角張つた顏とが、搖めく火に照らし出された。律師はまだ五十歳を越したばかりである。律師は徐ろに口を開いた。騷がしい追手の者も、律師の姿を見ただけで默つたので、聲は隅隅まで聞えた。

執つて（執りて）

平生不レ善レ書（ウセテ）
燕やどろをべたりとかみの
上　鷗外

「逃げた下人を捜しに來られたのぢやな。當山では住持のわしにいはずに人は留めぬ。わしが知らぬから、そのものは當山にゐぬ。それはそれとして、夜陰に劍戟を執つて、多人數押し寄せて參られ、三門を開けといはれた。さては國に大亂でも起つたか、公の叛逆人でも出來たかと思うて三門を開けさせた。それになんぢや、御身が家の下人の詮議か。當山は勅願の寺院で、三門には勅額を懸け、七重の塔には宸翰金字の經文が藏めてある。こで狼藉を働かれると、國守は檢校の責を問はれるのぢ



森鷗外筆

早う。（早く）
好からう。（好からん）

や。又總本山東大寺に訴へたら、都からどのやうな御沙汰があらうやも知れぬ。そこをよう思うて見て、早う引き取られたが好からう。悪いことはいはぬ。お身達の爲ぢや。

かういつて律師はしづかに戸を締めた。三郎は本堂の戸を睨んで齒咬をした。然し戸を打ち破つて踏み込むだけの勇氣もなかつた。手の者どもは唯風に木の葉のざわつくやうに囁き交してゐる。

この時大聲で叫ぶものがあつた。「その逃げたといふのは、十二三の小わつぱぢやらう。それならわしが知つてゐる。」三郎は驚いて聲の主を見た。父の山椒大夫に見まがふやうな親爺で、この寺の鐘樓守である。親爺は詞を繼いでいつた。

寢。。。 よう（寢ん）

田邊　今の京都府加佐郡舞鶴町。

「そのわつぱはな、わしが午頃鐘樓から見てゐると、築土（ついひぢ）の外を通つて南へ急いだ。かよわいかはりには身が輕いもう大分の道を行つたぢやらう。

「それぢや、半日に童の行く道は知れたものぢや。續け。

といつて三郎は取つて返した。松明の行列が寺の門を出て、築土の外を南へ行くのを、鐘樓守は鐘樓から見て、大聲で笑つた。近い木立の中で、やうやう落ち著いて寢ようとした鴉が二三羽、又驚いて飛び立つた。

あくる日に國分寺からは諸方へ人が出た。石浦に往つたものは姉の安壽の入水の事を聞いて來た。南の方へ往つたものは、三郎の率ゐた追手が田邊まで往つて引き返した事

向いて（向きて）

朱雀野　京都市の西郊。昔の朱雀大路。

を聞いて來た。

中二日置いて、曇猛律師が田邊の方へ向いて寺を出た。盥ほどある鐵の鉢を持つて、腕の太さの錫杖を衝いてゐる。後からは頭を剃りこくつて衣を著た厨子王が附いて行く。山城の朱雀野に來て、律師は權現堂で休んで厨子王に別れた。「守本尊を大切にして往け、父母の消息はきつと知れる」といひ聞かせて、律師は踵を旋した。亡くなつた姉と同じ事をいふ坊樣だと、厨子王は思つた。（森鷗外――鷗外全集）

中等國語讀本 新修二版 **卷三** 終

昭和四年十月五日印刷
昭和四年十月八日發行
昭和五年十月一日訂正印刷
昭和五年十月四日訂正發行

中等國語讀本（新修二版）

定價	
自卷一至卷四	各 金六拾四錢
卷五、六	各 金六拾錢
自卷七至卷十	各 金六拾壹錢

不許複製

編者　落合直文
編者　金子元臣

發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地
株式會社明治書院
取締役社長　三樹退三

印刷者　東京市神田區三崎町三丁目十二番地
細谷祐三

發行所　東京市神田區錦町一丁目
振替口座東京四九九一番
株式會社明治書院
電話神田(25)二六六九五番

鶴編 上 二〇